東京物語
愛蔵本
漫画/ふくやまけいこ
小説/きしかわおさむ
アニメージュ
'89・2月号
第2ふろく

はじめて読むかたへ

大正浪漫の香りが残る、昭和初期の帝都――東京市。

その東京で、当時もっとも活気にあふれていた町、浅草に〝動天社〟と呼ばれる出版社があった。

その〝動天社〟の新入社員桧前平介は、上野池之端で起きた〝ダイヤ盗難事件〟をきっかけに〝草ちゃん〟と呼ばれる青年と知り合った。

〝草ちゃん〟こと牧野草二郎は、そのもっさりとした外見とはうらはらに、鋭い観察眼と推理力を持っていた。

好奇心と行動力が旺盛な平介と知的遊戯に興味を示す草二郎。ふたりは協力して、東京に起きる難事件を解決していく。

そして、数々の事件の折に見せる草二郎の行動から、しだいに彼の過去が明らかになっていく……。

彼は大陸（中国）奥地に作られた研究所で、ある実験の被験者として育ったのだ。

果たして彼の真実の姿は……？

東京にひとりの青年がやってきた

東京物語

連載 第16回

上野駅

ふくやまけいこ

こっちから
たずねてみるか……
シゴトイライシタシ
シキュウライシャコウ
ドウテンシャ
ソクマヘイスケ
町1-5

すいません
田原町には
どう行ったら
いいですか
ん？

市電で行くか
でなきゃ浅草まで
地下鉄にのると
いいよ
ありがとう
ニヤリ

地下鉄は
初めてだ

行くぜ
周平
うん！

?
地下鉄
入口
兄ちゃんどうした
?
ドキドキ

ここどうやって入るのですか
これはね入場券がいるんだ
はっはっは

ほらあそこ荷物は見ててあげるから買ってきな十銭だよ

ありがとうおねがいします!

いまだ周平トランクを!
何やってんだ
のたのた
アニキィ…なんだかかわいそうだ

他人に同情してて
置き引きが
つとまるか!!
ぱかっ

入場券?
あの改札は
コインで
開くんだよ
でも
あの人たちが

あ!!

おやっ

遅れてごめんよ宮沢さんだね！
ボクが桧前です
それじゃ行こうか！市電も来てるし
原稿…
原稿の入ったトランクを盗まれました……

今まで書いた
原稿が全部
入ってる!?
ひでえや!!
置き引きの
風上にもおけねえ
やつだな!
元気出しな
兄ちゃん
俺たちも
探してやっから!
そーだ
そーだ!!
彼は働きながら詩や
童話を書いてるのさ
いいだろ
この詩!!
「小説愉快(ゆかい)」の
締め切りに
副山ケロ子先生の
作品が間に合い
そうにないんでね
……
かわりに彼の
童話を載せようと
思って呼んだんだ

わーいかみしばいだってー!!
上野駅ねぇ
あのへんは文太のなわばりだが

いいなぁ僕もやってみたいな……

ええっ置き引きの総元締めを!?

目はしがききそうだと
思って同郷のおまえと
組んだってのに
中味は紙の
束ときてらあ
マヌケな奴だよ
どーしょーも
ねーな!!

まったく
よお……
しく
しく

……

なあ
周平
泣くこたあ
ないんだよ
ぽん

だって
初日から
そんなうまく
できるわけ
ねえもんな
……アニキ
ごめん
ごめん

この話すっごく
いいっすよ〜〜

ほらほら
ここんとこ
読んで
ください
よ
……お

おまえって
奴は〜〜〜!!

うおぉ〜ん

なんだろ
あぉ〜ん
イヌの遠吠えみたい

いいなあ
周平
この
くだり!!
ね!!
たまんない
でしょ
わ〜ん

「どうしても雪だよ。おっかさん」
わ〜〜っ
「雪でないよ。あすこへだけ降るはずがないんだもの」
うっうっ
おーいじたばた
やめてくださ——い

がっ!
返そう周平こんないいもん俺たちにゃもったいない!!
返しましょうアニキ!!

どこへ?

電報が入ってるぞ……

おっ

落としもの？
別に来て
ないわ
そうか
ひょっと
したらと
思ったけど

やっぱり
悪質な
置き引きか

それも置き引き
連盟に入って
いない者の
しわざですね
ガチャ

よう平介
遅かったな
ワイ
ワイ
原稿
とれたか？
みんな
何やってんの!?

帝都映画の
衣装部から
借りたんだ
編集長を新年会で
びっくりさせてやるぞ
おまえの
ぶん

余興の練習かあ!
気が早いなあ
はっはっはー!!
俺たち仕事終わったもーん
残ってんのはお前と編集長だけだよ!

……
ぎゅっ

動天社か
変な名まえ

どうぞ
もしもし凹版印刷ですか?
最終入稿何時まで待ってもらえます?
え 4時?

ここであの人の本を出すんだな
キンチョーするなあオレ
ドキ
ドキ

何ていうか
わかってるな
周平
もちろん!

上野駅で
あんたに
ウソついて
持って
来ちゃって
ごめんね
ぽん
ちが———う!!

いいか地下鉄の駅で
ひろっただ!!
ひろった
ひ・ろ・っ・た!!
ア・アニキ
じーー

……
総合出版
焼天社
じろ
じろ

下谷の
ゴミ処理場には
なかったよ
ガヤ
ガヤ
もしもし
凹版印刷?
質屋さん
にもトランク
入ってなかったよ
そうか
ワイ
ワイ
ぽーっ

トントントン
ごめんください
ドキドキ
カチャ
なんかたのしそう
ドーン
どひゃら!!

失礼しました〜〜〜!!
ドタ
バタ
バタ

はっ
なんだいあいつら
?

桧前さんあの人たちですっ!!

おいおい平介!!
ダッ

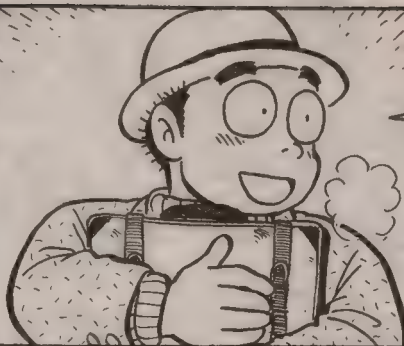
あいつにドロボウ役やらせようと思ったのに
ドタ
ミタ
もしもし…あら編集長！

はあはあ
こ、ここまで来れば大丈夫だろう

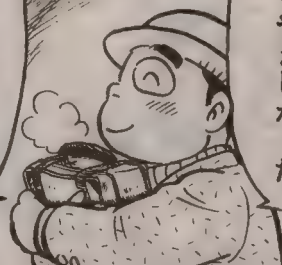
外見は出版社なのに中は警察なんていやあ危なかった!!
まったくだ…

おい！何を持ってるんだ
…あ！

置いてくりゃよかったのにバカ、バカ、バカ!
ポコポコポコ
わーん
すいませ〜〜〜ん

だってアニキ
こんだけ人がいても
トランクのなかに
どんないいもんが
入ってるか
知ってんのは
俺たち
だけでしょ!!

あそこで熊手を
選んでる女の子や
おっさんは
幸せそうだ
きっと家には
俺たちの
知らないいいもんが
待ってるんでしょう

そんなのが
いつも俺
うらやましかった
でもきょうは
みんなと同じだ…

…

——岩手の
雪ン子まつりも
もうじきですねえ
……お前
きのう出てきた
ばかりじゃないか
ザワ
ザワ
ワイ
ワイ

そうだ！
タイヤキ
買ってやろうか
いいの？

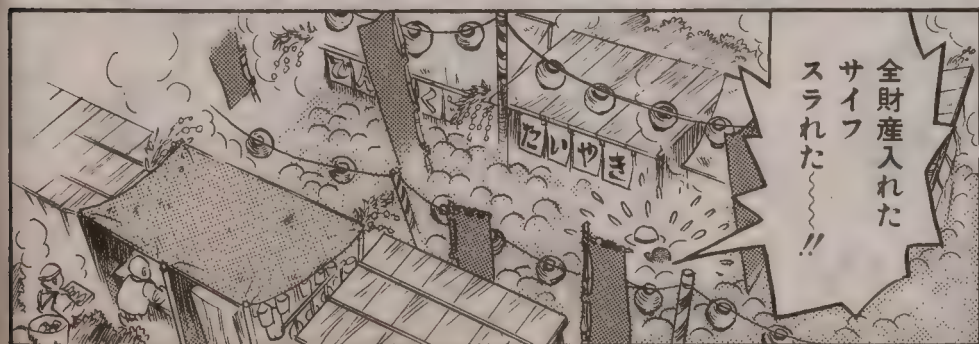
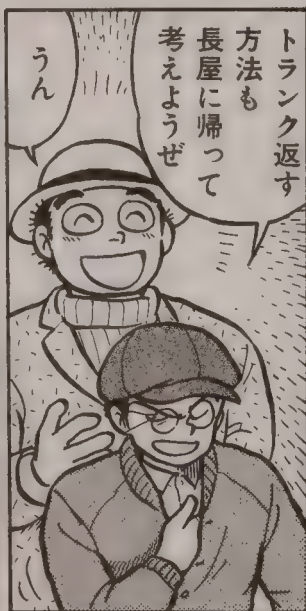
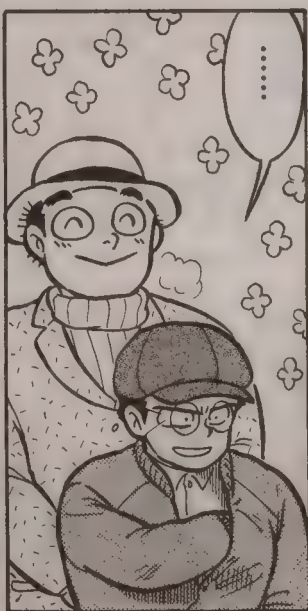
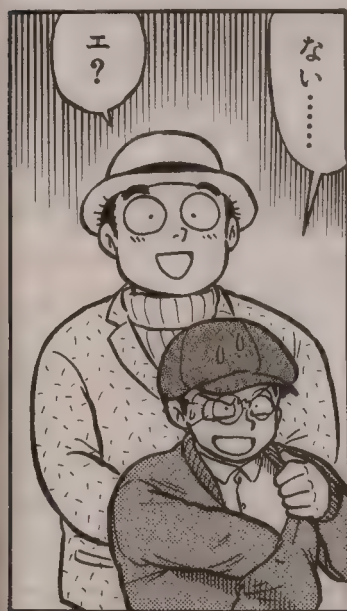
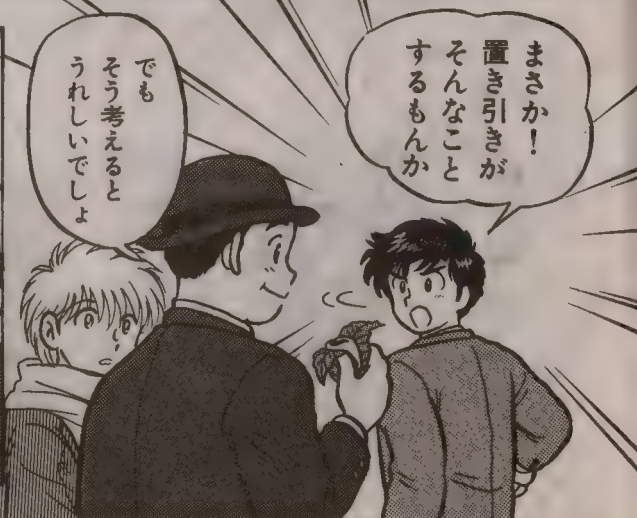
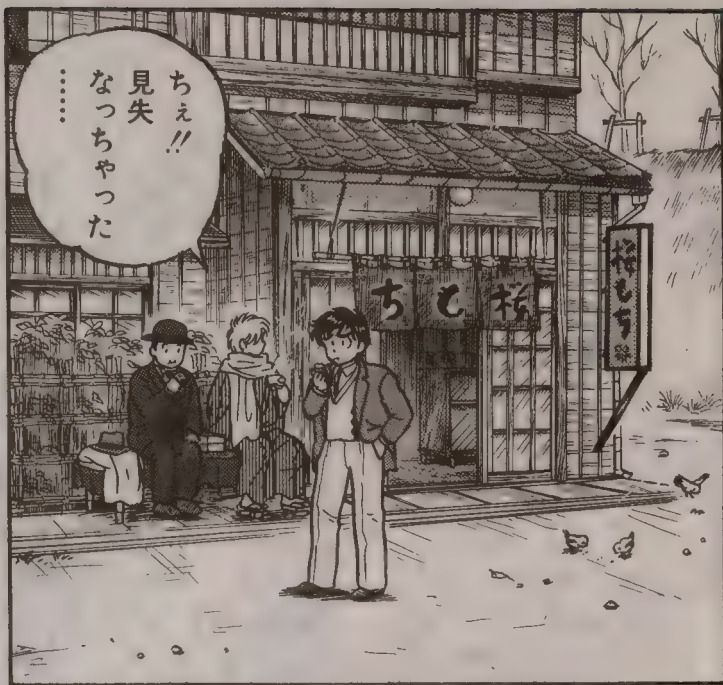
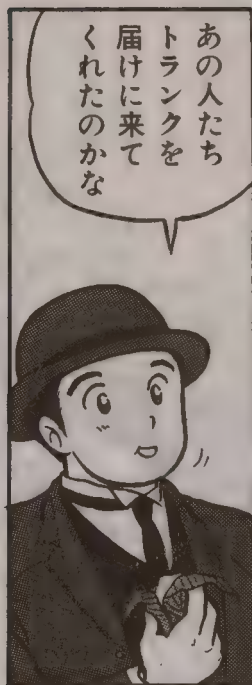
初仕事は
ダメだったけど
ためてた金が
まだちょっと
あるし
へい

トランク返す
方法も
長屋に帰って
考えようぜ
うん

……

ない……
エ？

全財産入れた
サイフ
スラれた〜〜〜!!
たいやき

ちぇ!!
見失なっちゃった……
あの人たち
トランクを
届けに来て
くれたのかな
まさか!
置き引きが
そんなこと
するもんか
でも
そう考えると
うれしいでしょ
もういちど
持ってきて
くれるまで
待ちますよ
で、でも
締め切りは
きょうなんだ~!!
いまから40枚
ほかの人に頼む
わけにも
いかないし
しゅーん
元気
出して
下さいよ
桧前さん
ちりりん
おい
あんたら!!

あんたの
心配した通り
うちの若いもんが
なわばり荒らしを
とっちめに
行ったぜ！
どうやら
川っぱたの
へちま長屋に
いるらしい!!
ワー
ワー
ワーワー
タタタ
あそこだ!!

勝手に商売始めやがって
そのトランクよこせ!!
これだけは渡せるもんかい!!
トランクはこっちのもの…
こわいよアニキー!!
やめろよ……わっ
このやろーよくもやったなっ
……

ああああ
ガラララ
ザザッ
ザザーン
ザブーン
ひゃ〜
た、たすけてぇー
ブルッ
原稿!!
ザバッ

何の
さわぎだ?

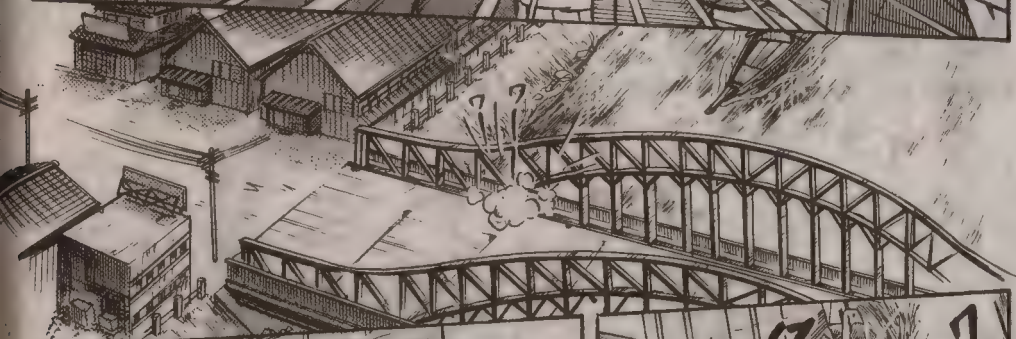
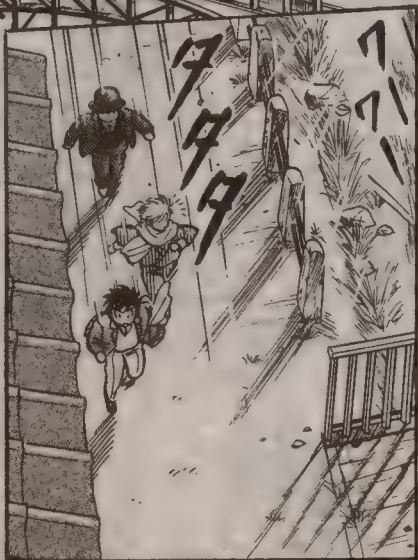
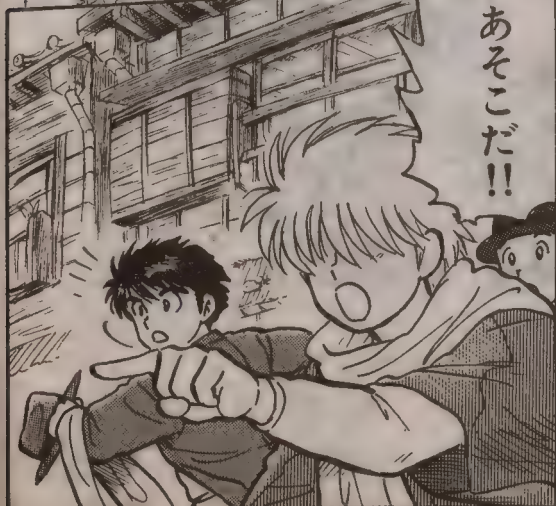
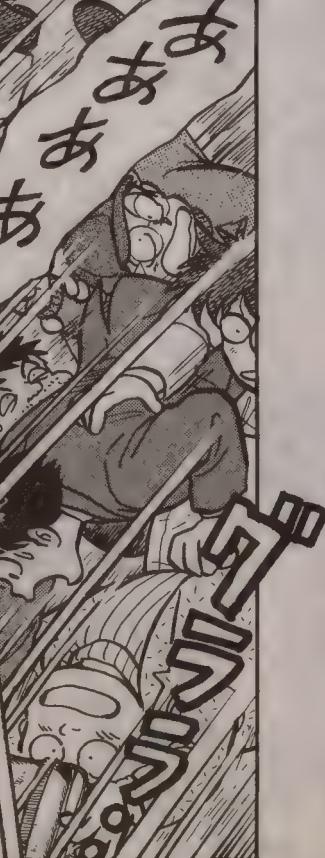
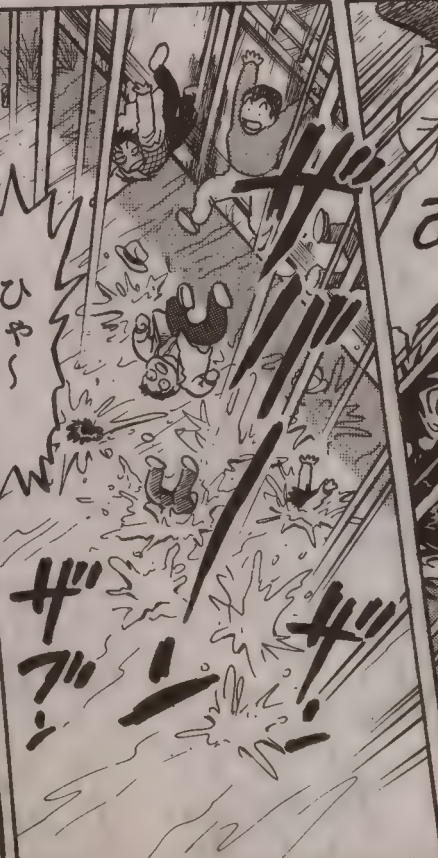
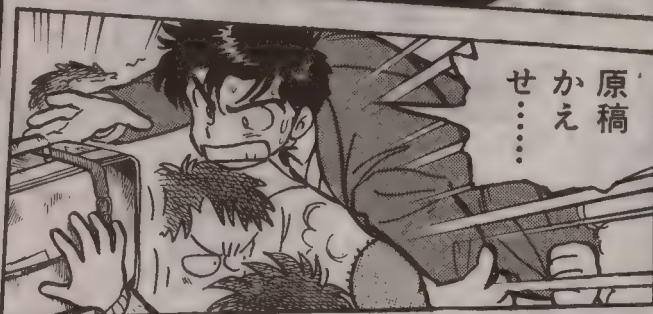
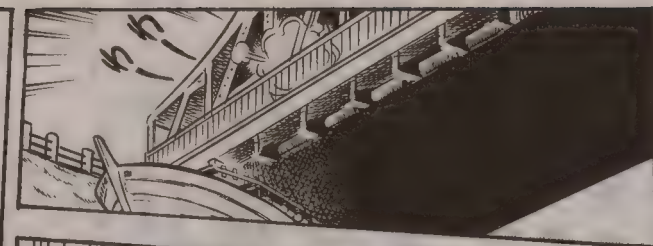
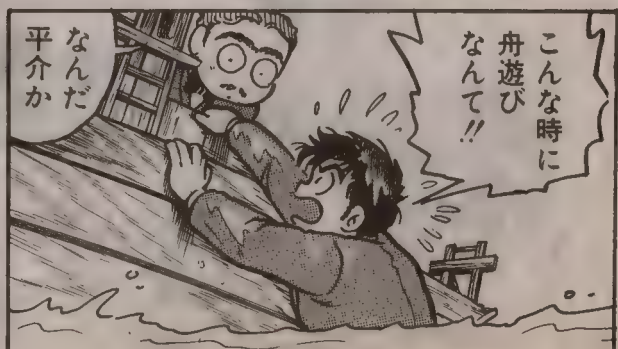
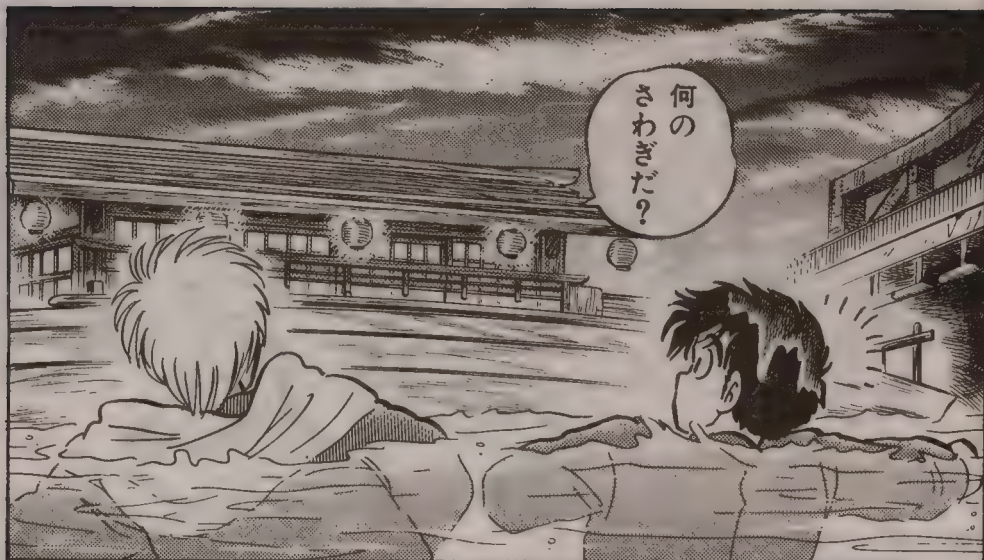
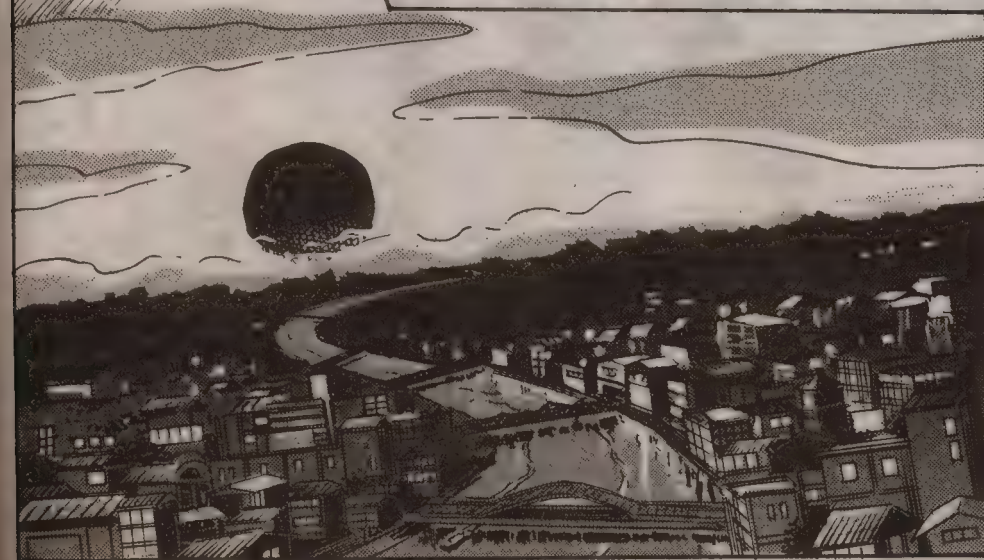
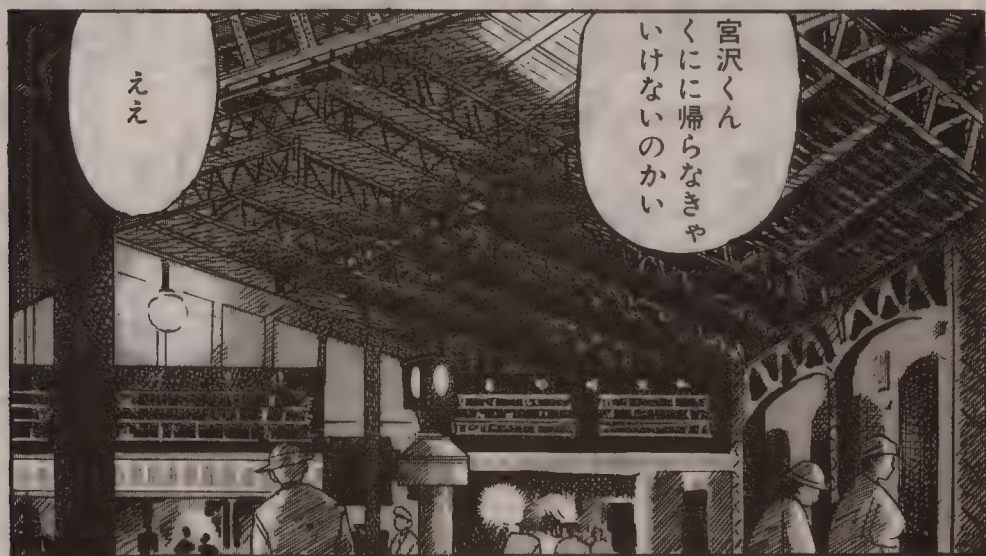
ひょい
トランクが
降ってくる
なんて……

編集長!!
ガタ
ガタ
ブル
ブル

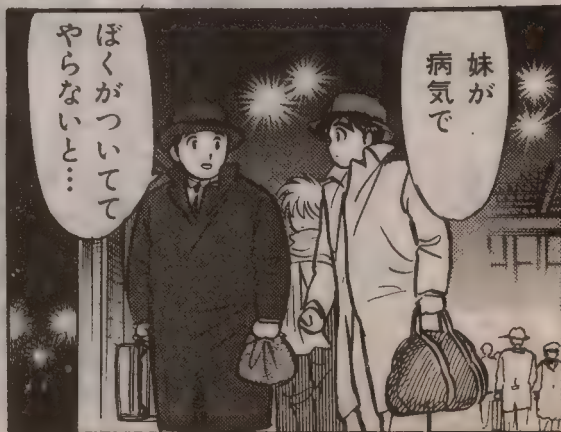
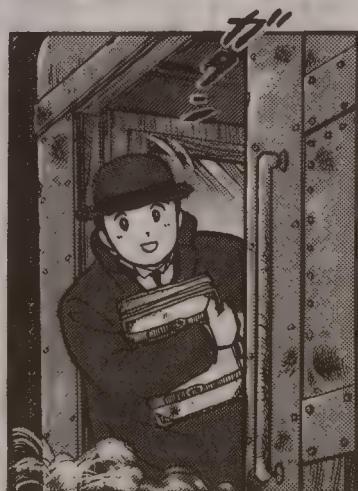
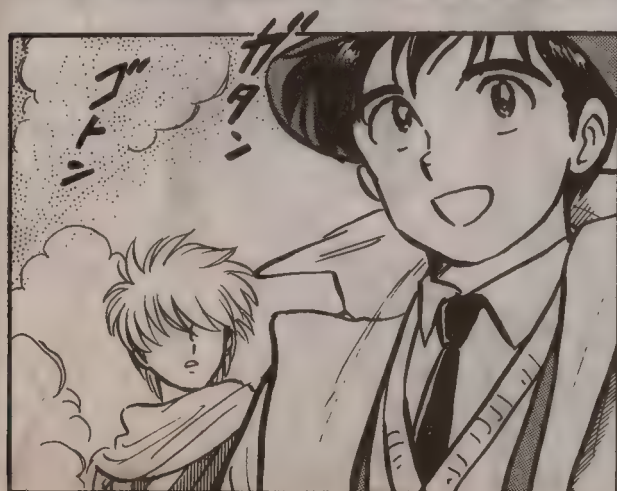
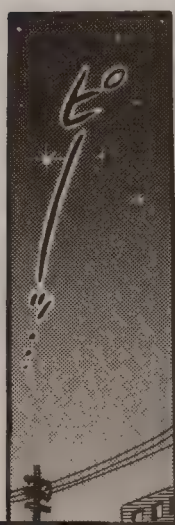
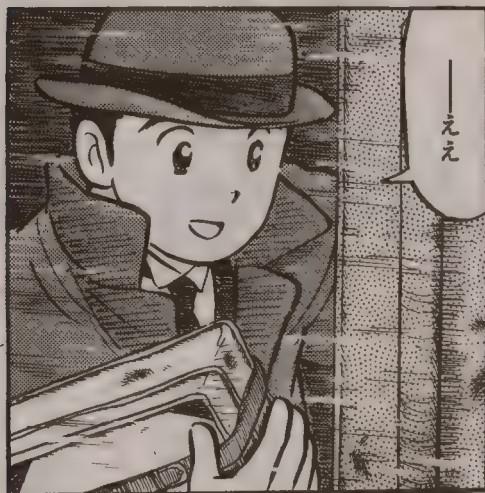
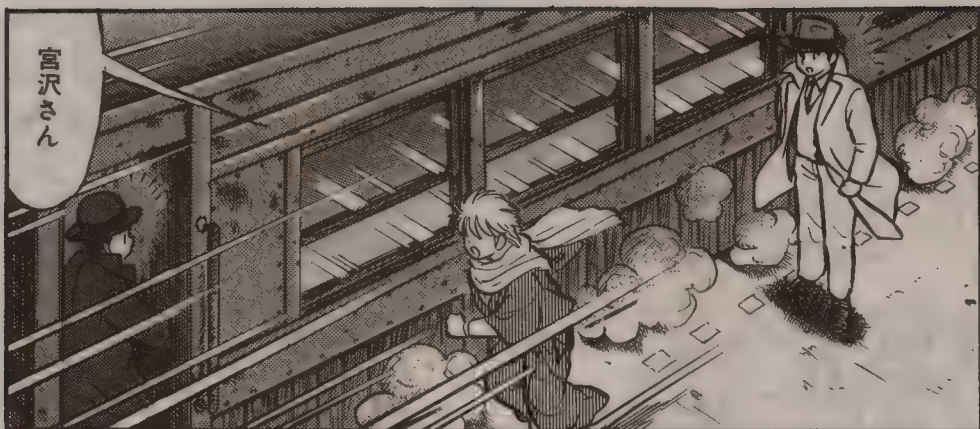
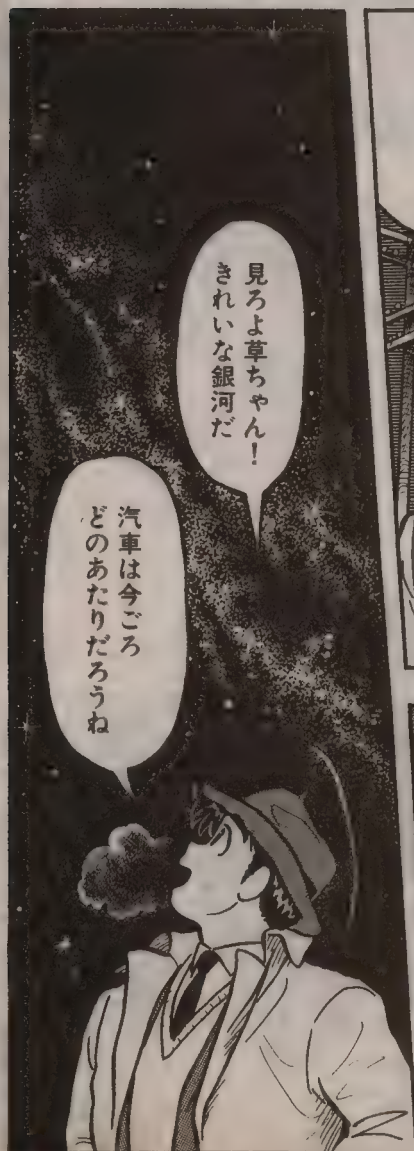
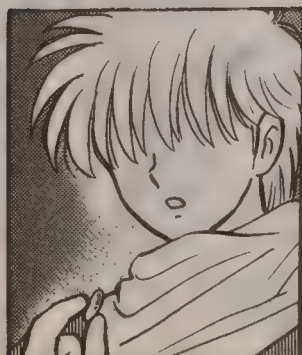
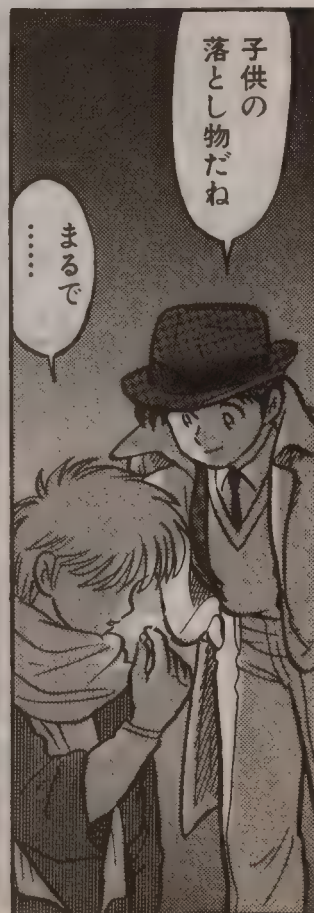
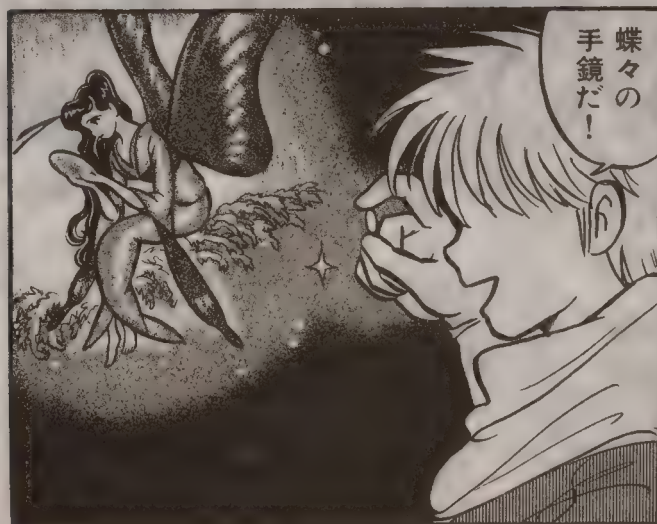
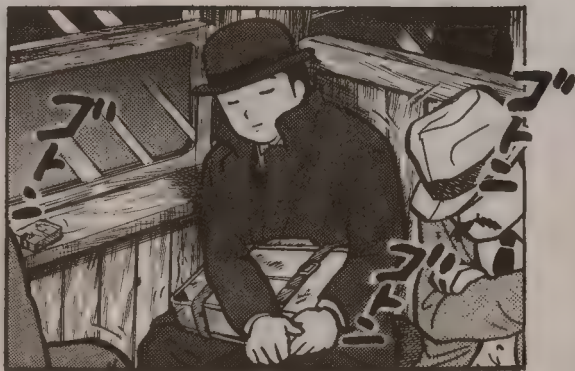
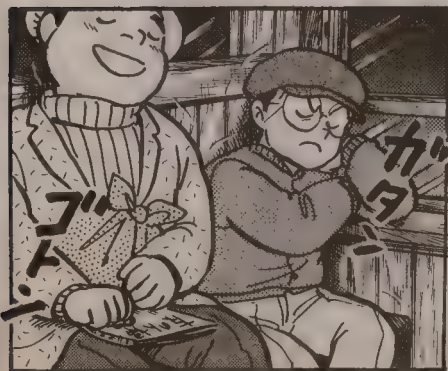
こんな時に
舟遊び
なんて!!
なんだ
平介か

何考えてん
のかなぁ
ぶつ
ぶつ
いい機会だ
紹介して
おこう

……
ぶく ぶく
あらら
おいおい兄ちゃんしっかりしなよ

上野駅

宮沢くん
くにに帰らなきゃ
いけないのかい
ええ

妹が
病気で
ぼくがついてて
やらないと…

結局ぼくは
何もできな
かったな
迷惑かけた
だけで…

いいえ
いっしょう
けんめいに
トランクを
さがしてくれて
ぼくは本当に
うれしかった
東京に来て
いちばんの思い出
です…
ありがとう

ピー
D51 723

それじゃ
元気で
ゴトン

ガターン

ガタン
ゴトン

宮沢さん
続けて…
書き続けて下さいね！
――ええ
いつかきっとぼくは本を…
ゴトン
ゴトン
ピーーッ…

だから詩とか小説とか読んでも

本当に自分がわかってるのかどうか自信がなかったんです…

でもあの人の詩は違っていた……

……

見ろよ草ちゃん！きれいな銀河だ

汽車は今ごろどのあたりだろうね

宮沢くんはきっと後世に残る作家になるぞ

何だい？
おはじきです

子供の落とし物だね
まるで……

蝶々の手鏡だ！

……
草ちゃんそれが「詩」だよ

そうか…

次号は再び本誌でお目にかかりましょう!!

アニメージュ3月号〈2月10日㈮発売〉につづく!!

小説東京物語

冬の花火

きしかわおさむ

一

「綺麗ねェ……」

夜空に咲く、大輪の花火を見上げながら、少女は大きな瞳を輝かせ感嘆の声をあげた。

毎年七月二十一日になると、東京の両国では川開きの花火大会が行われる。それは江戸情緒の面影を残す行事のうち、もっとも華やかなものであるといえよう。大正も、もうすぐふたけたになろうかというその年の花火大会は、南満州鉄道建設などの大事業が行われているせいか、市中の景気もよく、例年にない盛況であった。隅田川には幾艘もの屋形船が浮かび、両岸には錐を立てる隙間もないほど見物人が黒山を作っている。

空には赤や金色の花火がつぎつぎとひろがり、それはまるで五色の万華鏡を、クルクルと廻して覗いているように見えた。その花火を見つめながら、少女はさきほどと同じ言葉を繰り返

す。

「……ほんとうに綺麗」

「うん」

その呟きに答えるように、ひとりの少年が相槌をうつ。ふたりとも、年の頃は十二、三であろうか。少女は、この時代には珍しい洋装に身を包み、髪の毛も肩までのばし、その先は軽くカールしている。少年は僧主頭に絣の浴衣を着ており、手には団扇を持っていた。

つぎつぎと打ち上げられる花火を見上げながら、少女は再び呟くような口調で少年に話しかける。

「花火を見るのもこれで最後になるわ……」

「米国行きとうとう決まったのかい？　で、いつ日本を発つの？」

「来月、横浜から出る船に乗るの。だから一男さんに会えるのも、これでおしまいかもしれないわ」

「弓ちゃん……」

そのとき、大音響とともに夜空に巨大な菊の紋様が浮かび上がった。

「大輪変化菊だ。親父が作った尺玉だ。俺も将来、もっとすごいやつを作ってみたいなァ」

一男は弓子の話など、まるで聞いていなかったかのように夜空に咲く花火を見上げ、しっかりした口調で呟いた。

「そういえば、一男さんはおとうさまの跡を継いで花火師になるのが夢だったよね」

「うん。ホラ、いつか話したことがあったろう。俺は花火師になったら青い光のやつを作りた

いって」
一男が瞳をキラキラ輝かせながら答える。
「花火っていうのは酸化剤、炎色剤、可燃剤、発煙剤の組み合わせで作られているんだ。花火に色をつけるのは、そのなかの炎色剤なのだけど、赤、黄、緑色は簡単なんだけど、青い色は難しくて、よっぽどの腕がないと作れないんだ」
「その難しいのを作るのね」
弓子は楽し気にそういうと、いたずらっぽい瞳で一男を見た。
「ねえ、お願いがあるの」
「なんだい？」
「私が将来、日本に帰ってきたときに、その青い花火を打ち上げてくれる？」
「いいとも、お安い御用だ。そのときは特大のを上げてあげるよ」
力強くうなずく一男を、弓子はとても頼もしく思った。そして、何かをいいかけたが、その動作は周りの見物客からいっせいにあがったどよめきの声にかき消された。
対岸に作られた仕掛場の花火に火がつけられたのだ。〝滝の白糸〟、そう名付けられているその仕掛花火は、まばゆい金色の光を放ち、幾筋もの光の束を隅田川に注ぎ始めた。

二

「人捜し（ひとさが）ですか？　う〜む」

草ちゃんこと牧野草二郎は、友人である桧前平介の頼みごとを聞き、両腕を組んで思案を始めた。

草二郎は、浅草にある浅草寺の本堂、そのすぐ脇に建てられている影向堂という小さな堂のそばに寝起きしている自由人だ。人なつこい性格と、生来の観察眼の鋭さが幸いして、探偵業らしきものを生業としている。もっとも、それは彼が望んで職業にしているわけではない。ただ、ものごとを頼みやすそうな外見からか、自然とそうなってしまったのだ。

いっぽう、彼に仕事を持ってきた桧前平介という男だが、べつに草二郎の世話人というわけではなく、れっきとした会社務めで、動天社という出版社の編集をしている。ふたりの風貌は対照的で、平介が流行の洋装に身を包み、モダンボーイをきどるのに対し、草ちゃんは、銘仙の着物——それもかなり着古したものを年中着ており、お世辞にもオシャレとは云い難い格好をしていた。

しかし、このふたり、昨年五月に上野で起きた宝石盗難事件——通称、ビルマの夕陽盗難事件がきっかけで知り合い、盗まれた紅玉を草二郎の推理で取り戻して以来、妙に意気投合し、もう何十年も交際しているかのような間柄になっている。

「とにかく、依頼人に会ってみないか？　このへんじゃ、ちょっとお目にかかれないような垢抜けした美人だぜ」

空を見上げたままボーッとしている草二郎に、平介がじれったそうに声をかけた。草二郎は、視線を平介のほうへ移すと、ニッコリと微笑む。

「なるほど、美人ですか、平介さんがはりきっているのは、そういう理由だったんですね」

そのことばを聞いて、平介はあわてて口をとがらす。
「ち、ちがうよ。せっかく米国から十何年振りに帰国したのに可哀相だからだ。ほんとう、それだけさ」
「平介さん、顔が赤いですよ」
「うっ、キミも人が悪いなァ」そう平介は答えて、草二郎を睨んだ。と、とたんにプッと吹き出す。草二郎も、それにつられて笑いだした。一月も終わりに近づき、参拝客の数もめっきり減った浅草寺の境内に、ふたりの笑い声が響く。
　ひとしきり笑ったあと、平介は仲見世のほうを指さして口を開いた。
「キミは断らないだろうと思って、じつは国際通りのミルクホールで、彼女を待たせてあるんだ」

　その店は、仲見世を出てすぐの横丁を曲がったところにあった。洒落た赤レンガ造りの店で、店内に入ると電気蓄音機から流行の唄が流れていた。伴奏はヴァイオリンだけというその唄は、少しもの悲しいメロディで店内を静かな雰囲気に保っているような感じがする。
「弓子さん、お待たせしました。彼がさきほど話した草二郎くんです」
　平介は、窓辺の席に座って読書をしている婦人の前に立ち、草二郎を紹介した。
　婦人はゆっくりと、しかし無駄のない動作で本を鞄の中にしまい、草二郎のほうを向き、軽く会釈をした。年の頃は二十代なかばであろうか、群青色のワンピースを身につけているせいか顔色があまりすぐれていないように見えるが、とにかく美人である。髪の毛も、トーキー

で観る外国映画の女優のように電髪（パーマネント）がかけられ、肩にかかる部分にゆるいカーブがかかっている。
〈平介さんが、こんな朝早くからやってくるのも無理ないな〉
草二郎がそう考えたとき、婦人が立ち上がり口を開いた。
「このたびは御無理申し上げてすみません。なにしろ日本に帰ってきたのが、十三年ぶりで、頼れる身寄りもいないものですから」
そこでことばを切って、深々と頭をさげ、こうつけくわえた。
「田所弓子と申します」
「はっ、これは御丁寧に、どうもどうも」草二郎があわてて頭をさげる。
やがて二人は顔をあげ、その視線が重なった。弓子は無邪気な微笑を草二郎に送った。
〈しょうがない、もっとノンビリしていたかったんだけど引き受けるか……〉
弓子の笑顔を見た瞬間、草二郎はそう考えていた。
弓子の依頼は至極簡単なものであった。大正の終わり、正確には関東大震災のときまで吾妻橋のそばの長屋に住んでいた杉山一男なる人物を捜してくれというのだ。一男の家は、当時は有名な花火師だったのだが、震災後、行方不明になってしまっているという。たしかに数年前に東京市を襲った震災の猛威はすさまじく、何千、何万もの人間が家を焼け出されたし、その後は大規模な区画整理が行われ街並みは一変している。震災前の東京しか知らない弓子にとって、現在の東京はまったくの未知の都会なのだ。
「わかりました。自信はありませんが、やってみましょう」

草二郎がそう答えると、弓子は喜びながらかたわらに置いたハンドバッグから一枚の紙片と封筒をテーブルの上に取り出した。
「仕事の都合で、二週間ほど滞在いたしております。これはホテルの電話番号ですので、なにかわかったときは、ここにご連絡ください」
彼女はそういって、その紙片と封筒を草二郎の前にスッと押し出した。
草二郎は紙片と封筒を手に取ると「ちょっと失礼」といって、封筒の中身を確認する。中身は当然のことながら、捜査のための紙幣であり、なかには手の切れるような新札が十数枚入っているのがわかった。
「取りあえず、いまはこれだけお預かりしましょう」
草二郎はそういいながら、一円札を三枚ほど抜き取り、ふところにしまい入れ、立ち上がった。
「じゃ、平介さん、さっそく取りかかりましょう」
草二郎が平介に声をかける。
そのとき、黙っていた弓子がスッと立ち上がり草二郎の側に歩み寄ってきた。
「きっと、きっと見つけてください。向こうで両親が亡くなり、身寄りのない私にとっては、一男さんだけが唯一の知り合いなのですから……」
草二郎はしばらくのあいだ弓子を見つめたまま黙っていたが、やがて邪気のない笑顔を見せ「はい」とひとこと答えた。

三

「吾妻橋で花火師をやっていた杉山さんねェ……」
震災前から吾妻橋のビアホールのそばで材木屋を営んでおり、現在は楽隠居している町の古老、源之助はそういいながら白く伸びた山羊髭をしごいて考え始めた。
草二郎があちこちで聞きこんだ結果、吾妻橋で当時町内会会長をしていた源之助のことを知り、いまは蔵前に居を移しているその老人のもとを訪れたのは、弓子に会ってから三日目のことだった。源之助の住居は、いかにも楽隠居の身分に相応しく、路地裏にあった。
やわらかな冬の朝日が差しこむ縁側に通された草二郎は、世間話もそこそこに、杉山一男の一家のことを尋ねたのだ。
老人は唸りながら宙を見つめている。
「う〜む。花火師の杉山。杉山ねェ……」
源之助はひとりごとをいいながら、記憶の糸を必死にたぐっていたが、やがて手をポンとたたいて、こう叫んだ。
「あっ、思い出した。いろり長屋の杉公のことだ。杉山さんなんて、呼んだことがなかったからすっかり忘れていたが、あいつにちげェねェ」
「で、その杉山さんはいまどこにいらっしゃるんですか？」
草二郎が身を乗り出す。と、源之助はいきなり首を振って、こう答えた。

「死んだよ。震災のとき……」
「奥さんと息子さんはどうです？」
ひとことも聞きもらすまいと、草二郎はいっそうつめ寄る。
「かかァも一緒に火に巻かれたよ。だが、一人息子のかずぼうは川越まで火薬の買い出しに行っていて助かったんだ」
「じゃあ、一男さんは生きているんですね。それでいま、どこにいらっしゃるか分りますか？」
草二郎は目を輝かせて、そう尋ねると、源之助は再び首を振った。
「それが、両親の供養が済むと何処かへ行っちまいやがったんだ。町内会の連中が、せっかく呉服屋に奉行させてやろうっていってたのにな」
それだけいうと、源之助は茶をグッと一気に飲み干した。
〈どうやら、これ以上聞いても無駄みたいだ〉
草二郎はそう考え腰を上げた。

源之助のもとを辞した草二郎は、もういちど当時の新聞を調べてみようと考え、上野にある帝国図書館に向かった。
蔵前から市電を乗り継ぎ、省電上野駅前で下車した草二郎は、駅前に「八里半」の看板を出している焼きイモ屋の屋台で軽く昼食を済ますと、上野公園につづく石段をのぼり始めた。
平日なので、上野の山は週末のような人けはない。たまにすれちがうのは、いかにも博物館や美術館に用があって出向いたらしい山高帽子にフロックコートの紳士や、物見遊山にやって

きたらしい観光客だけである。
周囲が静かなせいか、鳥のさえずる声もいつもより聞こえる。
〈さすがに一月も終わりになると人が少なくてあの人もさびしそうだな〉と、西郷さんの銅像を横目で見ながら、のんびりと歩を進めていた草二郎の耳に、突然、かん高いサイレンの響きが聞こえてきた。
〈事件かな?〉
草二郎は、その音を聞くなり袴の裾をめくって走りだした。
サイレンの音は上野公園の奥まった所にある博物館の先から聞こえてくる。
つい先刻まで静寂だった上野の森に、サイレンの音と草二郎の走る下駄の音が木霊する。
〈美術館のほうだな〉
草二郎は強まる好奇心をあおるように、走る速度を上げた。やがて美術館の前へとたどり着いた彼は、そこに警察の公用車である黒塗りのT型フォード二台と数人のいかめしい制服を着た警察官の姿を認めた。
上司らしいカイゼル髭を生やした中年の警官が、なにか叫んでいる。それを聞いている巡査たちも腰のサーベルに手をかけ、緊張した面持ちで耳をかたむけている。
平日とあって見物人は少なく、草二郎は難なく美術館の入口まで歩を進め、周囲を油断なく見渡している若い巡査に声をかけた。
「あのうー、何があったんですか?」
声をかけられた巡査は、草二郎をジロジロと見廻したあと素っ気ない口調で、手を振りなが

ら答える。
「何があろうと関係ない。それより捜査の邪魔だ。さあ帰った帰った」
草二郎は、そんなことにはおかまいなく、いつもの人なつこい笑顔を浮かべてしつこく喰いさがる。
「ねえ、そんなこといわないで教えてくださいよ。ねっねっ」
「ええい、駄目といったら駄目だ。あんまりしつこいと留置場に連れて行くぞ！」
巡査がそうどなって草二郎を押しやろうとしたとき、後ろから声がかけられた。
「牧野君、牧野君じゃないか」
その声に草二郎が振り返ると、そこには薄茶色の外套に、帽子を耳までかぶった中年の男性が立っている。
「警部殿！」草二郎を押しやろうとしていた巡査は、ひと声そう叫ぶとサッと敬礼した。
草二郎はしばらくのあいだ、警部と呼ばれた男をしげしげと見つめていたが、やがてだれだか思いだしたらしく、ニッコリと微笑んで口を開いた。
「たしか上野署の柏原警部でしたね」
そういうとペコリとおじぎをした。
「ずいぶん久し振りだね。相変わらず浅草寺に野宿しているのかね？」
柏原警部は草二郎に会ったのがうれしくてしようがないかのように、満面に微笑をたたえている。
「はあ、相変わらずの風来坊をやっています。ところで」草二郎はいったんことばを切り、少

し間を置いてから真剣な顔で尋ねた。

「いったい、ここで何が起こったんですか？」

柏原警部は草二郎の問いにはすぐ答えず、腕を組み宙に視線を移し、ウームと唸りながら思案を始めた。やがて決心がついたように視線を草二郎に戻すと、つかつかと歩み寄り、ポンと肩に手をかける。

「ここは説明するよりも、現場を見てもらったほうがいいかもしれん。去年の不忍池のダイヤ消失事件と同じように君の知恵を借りることになるやもしれんからな」

そういうと柏原警部は草二郎の肩をポンポンと軽くたたき、ポカンとしている先ほどの巡査に美術館の通用門を開けさせた。

四

帝国美術館は、帝国ホテルなどの設計で知られる米国の建築家F・L・ライトの手によるもので、自然との融和を唱えた有機建築主義の彼らしく、機能一点張りでない暖みのある造りになっている。

入口の左右にある大理石の柱は、古代ギリシアのエンタシスを模しており、建物の内側にはアールヌーボー調のタイルが貼られ、床は赤茶色で木目が美しいマホガニーの板張りになっていた。

柏原警部は、草二郎の前に立って建物のなかに入り、さっさと歩いて行く。いくつかの回廊

を曲がり、廊下の壁の掲示板に〝近世美術展示室ハ改装中ニツキ立チ入リヲ禁ズ〟と書かれてあり、その掲示が示す矢印の方向に柏原警部は向かっている。

やがて、廊下の突きあたりが両開きの扉になっているところにたどり着いた。扉の両側には巡査が立っており、彼らは柏原警部の姿を認めるとサッと敬礼し、そのあとすぐに草二郎にいぶかしげな視線を送ってきた。扉の上には案のじょう〝近世美術展示室〟と書かれた真鍮のプレートがかかっている。

「かまわん、入り給え」

柏原警部は草二郎にそう声をかけると、片手で扉を押す。蝶番が錆付いているのかギギーッという軋むような音を立てて扉がゆっくりと開く。

展示室はおよそ五十坪ほどの広さであった。壁には江戸時代の浮世絵や書画が飾られており、部屋の中央にはいくつかの仏像が置かれている。鑑識官らしい白衣を着た何人かの人間が、部屋のあちこちを調べていた。

「何か新しくわかったか？」

部屋のなかの誰にいうでもなく柏原警部がゆっくりとした口調で訊いた。その声に答えるように中央の仏像を調べていた男が腰を上げ振り返る。

「いいえ、まだ何も見つかりません」膝に着いた塵埃を払いながら男はそういうと、申し訳なさそうに頭をさげた。

「もうそろそろ事件について話してくれてもいいんじゃないですか？　ねえ警部さん」

草二郎が警部の肩ごしに囁く。警部はうなずいて部屋の隅に草二郎を導いた。

「その前に誓ってもらいたいことがある」警部は真剣な眼先で草二郎に話しかける。
「諸般の事情があって、今回の事件は表沙汰にはできんのだ。そこのところを考えて、他言は無用。決して誰にもいわぬと誓うのなら……」
草二郎は誰にもいわぬと誓い、柏原警部から今朝起きた事件を教えて貰った。それは不思議な盗難事件であった。
窓ひとつない、この展室に飾られていた国宝級の浮世絵十枚が、唯一の出入口である扉に鍵がかけられていたにもかかわらず忽然と消失してしまったというのだ。しかも、ただ消えたわけではなく、巧妙に作られた偽物にすり替えられていたというのだ。昨夜は館長が直々に見廻ったあと、しっかりと鍵がかけられており、今朝、帝大の美術研究室の先生が仏像の調査に来館し、扉を開いたときはすでに偽物になっていたという。
つまり、昨夜から今朝まで、この五十坪余りの展示室はまったくの密室状態だったのだ。
盗まれた浮世絵はいずれも高名な作者のもので、売りに出されればすぐわかるという代物だ。
犯人はいったいなんのために、しかもどうやって密室内に潜入し、浮世絵を盗み出したのか皆目見当がつかないという状態であった。
柏原から詳しい説明を聞いた後、草二郎はひとつ質問をした。
「あのう、今朝盗難を発見した学者さんが怪しいということはありませんか？」
柏原は、大きく首を振って否定する。
「いいや、あり得んな。事件を発見した帝大の有馬博士は勤続三十年の男でね。品行方正、学内でも〝金剛石の有馬〟と異名を頂戴するくらい真面目な男だ。それに、博士が部屋に入っ

て外の警備員を呼ぶまで五分と経ってないんだ。いくらなんでも、そのあいだにすべての絵を額からはずし、偽物とすり替えるなど不可能だ」
「鍵はどうです？　たとえば合鍵は？」
「それも調査済みだ。鍵は三つあるのだが、ひとつはここの館長がつねに身につけており、もうひとつは警備員室にあり、絶えず管理されている。最後のひとつは文部省の金庫の中だ。どれも複製をとるなんてことはできんよ」警部はそういって肩をすくめた。
そのとき、鑑識員が掌になにやら載っけて話しかけてきた。
「警部、こんなものが落ちていましたがなんでしょうね？」
差し出された掌の上には、くすんだ茶色の木片らしきものがあった。
「どれどれ」草二郎が覗きこみ、指で摑もうとする。
「コラッ！　触っちゃいかん！」鑑識官はあわてて手を引っこめる。
「意地悪。ちょっと見せてくれたっていいじゃないですか」
「田辺君、見せてやってくれたまえ」柏原警部は、鑑識官にやさしく命令する。田辺と呼ばれた鑑識官はしぶしぶ隠していたものを草二郎に渡す。
大きさは一寸（約三センチ）位であろうか、木片であることに間違いはないようだ。草二郎は一瞬、ひょっとしたら展示されている仏像のどれかが破損しており、その破片かと考えたのだが、その考えはすぐに追いださねばならないと気がついた。その木片は、この展示室に飾られている、どの仏像とも色あいが違っていたからだ。
「なんでしょうね……」草二郎は柏原警部に木片をそっと手渡す。柏原警部は人指し指と親指

で木片を持ち、天井からさがっているシャンデリアの光にかざしてみた。だが、何も発見できなかったらしく、軽く溜息をつくと、鑑識官の手に戻した。

五

「するると杉山一男なる人物は、川越のどこかに住んでいるんじゃないか。そういうんだね」と草二郎に聞き返した。

「ふうん」
と、平介は感心したようなひくい唸り声をあげると、

「すると杉山一男なる人物は、川越のどこかに住んでいるんじゃないか。そういうんだね」と草二郎に聞き返した。
草二郎は「ええ」と考えながら、蕎麦湯をすする。
平介が勤めている出版社に草二郎が訪ねてきたのは、弓子からの依頼を引き受けて四日後のことであった。平介は帰り仕度もそこそこに草二郎を花川戸町にある馴染みの蕎麦屋に誘ったのだ。
草二郎は、そこで現在までにわかったことを平介に説明した。すなわち、杉山一男の両親は震災で死亡しており、一男はそのあと身寄りもなくなり何処かへ行ってしまったということをである。
説明し終えた後で、草二郎はこうつけくわえた。
「ねえ平介さん、僕は思うんです。子供心に固く決心したことって、そうそう変わるもんじゃないって……。ですから、杉山一男さんは現在、花火師をやっているんじゃないかって……」

「なるほど」と平介が相槌を打つ。
「で、調べてみたんです。東京市内の花火組合員のなかに杉山一男さんがいないかって」
「で、どうだったんだい」箸に蕎麦をひっかけたまま平介が身を乗り出す。
「駄目でした」と草二郎が力なく答える。
「でも、それは東京市内に限っているからではないかとあとで考えました。そこで、今度は東京近郊のすべての花火組合にあたってみたんです」
「結果は？」平介が目を輝かせる。
草二郎は無言で首を振る。平介はがっくりとうなだれ、箸にひっかけた蕎麦を再び丼に戻した。
草二郎は、しばらくしてからポツンとひとりごとのように平介に話しかけた。
「しかし、川越に西条一男なる花火師が在住しており、年齢も一致することがわかりました」
平介は箸を振りながら、「名前が同じでも苗字がちがうんじゃなあ……」
とがっかりしたような口調で呟く。
「——養子。川越の花火師の養子になっていたというのはどうでしょう。実際、震災で孤児になり養子縁組で貰われていった人の話をよく聞きますよ」
そういうと草二郎はニッコリと微笑み「食べないのなら戴きますね」といって、平介の丼を自分のほうに引き寄せた。
冒頭、平介が草二郎に杉山一男が川越にいるというんだねと聞き返したのは以上のようなやりとりがあったあとである。

「じゃあ、さっそく、川越に行って確かめてくるんだろ。明日行くのかい？」
平介は弓子の喜ぶ顔を思い浮かべながら草二郎に尋ねる。
草二郎は蕎麦をすする手を止め、口のなかのものをゆっくりと飲み込んでから申し訳なさそうに答えた。
「それが駄目なんです」
「駄目って何故？」平介が口をとがらす。
草二郎は困ったように頭をポリポリと掻きながら小声で、
「じつは断わりきれない仕事を引き受けちゃって、当分それにかかりきりになりそうなんです。川越に行くとなると汽車と馬車を使っても、丸一日がかりです。とてもそんな時間は……」
「仕事？　なんだよ仕事って？」平介がいぶかし気に尋ねる。草二郎のいう仕事とは、もちろん帝国美術館の浮世絵盗難事件なのだが、柏原警部との約束がある以上、平介にもいうことはできない。
「内緒です。悪いんですけど……」
草二郎が自分にそう言う以上、過去の経験からして教えてくれるとは思えない。平介はよほどの事情があるんだろうと察し、話題を変えることにした。
「ところで、きょう本郷で意外な人にあったんだ。誰だと思う？」
平介はニヤニヤしながら訊いてくる。
草二郎はニコニコしている平介の顔を見ながらハッキリとした口調で答えた。
「女性ですね。それも美人」

「おっ、ズバリきたね」
「その人の名は田所弓子さん」と、草二郎はきっぱりといいきった。
平介が目を丸くして驚く。
「ど、どうしてわかったんだい。男性とも女性ともいってないのに？」
「簡単ですよ。平介さんは女性と会った話をするときは必ずニコニコしてます。とりわけ相手が美人だとなおさらです。最近、平介さんが会った美人で、僕も知っているのは弓子さんだけですから」
「俺って、そんなに単純かな……」
「はい」
「うーん、それだけきっぱりいわれると怒る気にもならないな。で、弓子さんだけどひとりじゃなかったんだ。驚くなよ、津島翁と一緒だったんだぜ」
「ツシマオウ？」
草二郎が鸚鵡返しのように呟く。どうやら全然知らない人物のようだ。平介はやや呆れた顔で、
「津島財閥の重鎮と呼ばれている津島要八郎を君は知らないのかい？」と尋ねた。
草二郎は黙ってうなずく。
平介は得意気に、新聞や雑誌などから得ている津島要八郎についてのことを話し始めた。それは以下のようなものである。
津島要八郎。その名は立志伝中のひととして、国内では知らぬ人はいないといっていいほど

の人物である。
薩摩の下級武士の出ながらも、明治維新の際に目ざましい働きをし、その功績によって与えられた褒賞金を元手に製鉄工場を作り、日清、日露の軍需景気によって、一大財閥を築いた。また、先の震災ではいち早く帝都復興計画に着手し、その事業における手腕は高く評価されている。現在は津島財閥の会長として、第一線を退きながらも政財界のパイプ役として絶大なる力を持っている。

最近では、米国で新事業に着手するという噂もあるが定かではない。とにかく、わが国の大立者の一人であることには間違いない。

草二郎は平介による津島要八郎に関する講釈が終わると、

「なんで、そんな偉いさんと知り合いなんでしょうかね、弓子さんは」と訊いて、茶をすする。

「さあね。しかし彼女は米国で貿易の仕事をしているから、その関係じゃないの」と素っ気なく答えた。

「ところで、杉山一男氏の件だが、幸い明日は土曜で会社は半ドンだ。弓子さんに相談してから川越には僕が行ってみるよ」

そういいながら平介は草二郎の後ろに視線を走らせ、「お客さんのようなので僕は帰るよ」といって席を立った。草二郎が振りかえると、入口に柏原警部が立って店内を見廻しているのが見えた。どうやら緊急の用件らしく、ふだんは温厚な警部がイライラしているのがわかる。

草二郎は柏原警部に手を上げて合図すると、彼に気づいた警部はホッとした面持ちで、こちらに向かって歩いてくる。

平介は席を立ち「じゃあまた」と小声でいうと、警部とすれちがいに店を出て行った。
時刻は午後七時になろうとしている。

六

しんと冷えた暗い隅田川沿いの小道を、草二郎と柏原警部がゆっくりと歩いている。天空には満月がかかり、その煌々とした光が二人の姿を薄ボンヤリと浮かびあがらせている。
隅田川の川面には薄く夜霧がたなびき、ときおり小型船の霧笛らしきものが聞こえてくる。
「何かわかりましたか？」草二郎が白い息を吐きながら質問する。柏原警部は、草二郎をチラと横目で見てから無言で首を振った。
「……そうですか」
「せめて、どうやって盗み出したかわかればいいんだがなア」警部がポツンという。
草二郎はふと立ち止まり、警部のほうを振り返り、
「それについては、大体わかっています」と、ハッキリとした口調でこたえた。
柏原警部は目を丸くして、いま、草二郎がいったことばの意味の重大さに驚く。
「ほ、ほんとうかね。盗み出した方法がわかったというのは？」
そういいながら、警部の両腕はしっかりと草二郎の肩をつかむ。
「いったい、どうやったというんだ」
草二郎は悪戯っぽい笑顔を浮かべて、

「いまはまだ推測の域を出ませんので申し上げられません」と答えた。
「そんなこといわないで、なア草二郎君」
警部はなだめすかすような口調で哀願する。
「あと一日待ってください。そうしていただければ、犯行方法はおろか犯人も教えてあげられるかもしれません」
草二郎は、そういうと視線を警部から隅田川の方に移してしまった。
警部はしばらくのあいだ、思案していたようだったが、やがてひとこと「わかった」といって、外套の内ポケットからシガレットケースを取り出し、なかから煙草を一本取り出し火をつけた。
フーッと紫色の煙を占吐き出しながら警部は話題を変えた。
「ところで、君がかかえている人捜しの仕事だが、そっちのほうはうまくいっているのかね？」
「ええ、まあ」
草二郎は振り返りもせず、黒い川面に映っている月を見ながら答える。
「何か警察の方で協力できることがあったら、いつでもいってくれないか。お礼ができない分、少しでも役に立ちたいからね」
草二郎は警部の、そのことばを待っていたかのように微笑んだ。
「それじゃ、おことばに甘えてお願いしちゃおうかな」

いっぽう、こちらは浅草橋にある平介の下宿である。震災後に建てられたふつうの家の二階家であるが、二階の三室が勤め人用の下宿になっており、平介の部屋は階段を上がって、すぐ脇にあった。

部屋のなかは、さすがに雑誌社に勤めている人間らしく、種々雑多の本が、ところ狭しと、うずたかく積まれている。

平介は、その本の山のなかになかば身を埋めるようにして調べものをしていた。その格好といえば、いつものダンディぶりの面影はなく、ズボンにセーターを着こみ、その上に縕袍をはおっている。

「駄目だ、見つからない。確かにこのあたりにあったはずなんだが……」

と、ブツブツひとりごとをいいながら、本の山をひっくり返していたが、やがて「あった！」と叫んで、一冊の大判の雑誌を取り出した。

それは大手の新聞社が大正十三年に創刊した、写真を中心に構成されているグラフ雑誌であった。

表紙には米国の摩天楼の写真が印刷されている。見出しには、こう書かれていた。

〝巻頭大特集米国横断見聞録〟

「これだ、これこれ」といいながら、表紙をパンパンと軽くたたき、頁をめくり始めた。

特集頁の大半は、米国各地の名所、旧跡の写真で構成されており、ところどころに各地の市民のスナップもあって、地域別の街の様子が生き生きと紙面を飾っている。

〈このへんが、通俗雑誌とちがって、いかにも新聞社が作った本だな。とおり一遍の旅行案内

本とはちがうや〉
などと平介は感心しつつ、丹念に頁をめくる。やがて、その手がある頁で止まった。目ざすものを見つけたらしく「これだ……」と低くつぶやいて雑誌を両手で顔に近づけ、喰い入るように見つめ始めた。
それは全米有数の貿易港シアトルで開かれた、パーティー会場の様子を写した一枚の写真だった。
各界の名士らしい、正装に身を包んだ紳士淑女達が談笑している。
そのなかに平介は顔見知りの人物を確認した。二度、三度と見返し、〈間違いない〉と確信する。
カクテルドレスに身を包んだ、その女性は田所弓子であった。
弓子は、三人の米国人らしき年配の男性に囲まれ微笑んでいる。
〈最初に会ったときから、どこかで見たような気がしてたんだが、この本で見ていたのか〉
平介はひとり納得すると、明日は一番で弓子に会いに出かけようと思った。

七

翌日、桧前平介が勤めている出版社に出勤してきたのは午前十一時ごろであった。編集室には校了後ということもあって、婦人記者の今井久枝が唯ひとり、新聞をパラパラとめくっているだけである。

「おはようございます。なんだ、まだ皆来てないのか」
遅刻が多い平介にとって、定時出社はチョッピリ自慢である。それだけに少しガッカリした様子だ。
久枝は新聞から目を離し、笑顔で平介を迎える。
「おはようございます。ちょっと待っててくださいね。すぐにお茶を入れますから」
「ありがとう。でも、すぐに出かけるからお茶はいいですよ」
平介は、そう答えながら机の上の伝言紙に気づいた。
「あら、だって日比野先生の原稿は上がったんでしょ」
久枝が不思議そうに尋ねる。
「うん、きょうはちょっとヤボ用でね」
と、平介はなにくわぬ顔でいいながら、机上の紙片を取り、それを見た途端、アッと叫んだ。
「どうしました」
久枝が近づいてくる。
平介の手にしている紙片には、見慣れた草二郎の筆跡で、こう書かれていた。
〃田所弓子ナル人物ガ、存在シテイタト云ウ記録ハ、役所ニハナシ。充分注意ヲ用スルコト〃
平介は久枝に見られないように「いや、なんでもない」と答え、紙片を片手で丸め、背広のポケットに放り込んだ。
〈弓子さんが実在しない人物だって？　そりゃいったいどういうことだ？　しかも、なんで草二郎君がそのことを知っているんだ〉

と、平介の頭のなかは疑問でいっぱいになりかけたが、すぐに頭を振って気を静めると、コートを引っかけ、編集部を出た。
編集部をあとにした平介がやってきたのは、草二郎が寝ぐらとしている浅草寺であった。だが、いつもなら昼過ぎまで境内でノンビリと寝ているはずの草二郎の姿は見えない。あたりの顔見知りの人間に聞いてみても、今朝はまだ見ていないと口をそろえて答える。どうやら昨夜から帰っていないようだ。そう判断した平介は、弓子に会いに行くことに決めた。
草二郎は、今までだって黙ってブラリと二、三日姿を消すことが度々あり、心配はないと考えたからだ。
〈……それに、もしものときは、意外なところから現われるかもしれないからな〉
平介はふと、そう思い、来た道を引き返し、仲見世の土産物屋で海苔煎餅の袋詰めを弓子への土産として買い求めた。
国際通りに出ると、おりしも上野行きの路面電車がゴトゴトやってくるのが見えたので、それに乗り込み、池之端にあるホテルに向かうことに決めた。
路面電車——市電は、先年、日本初の地下鉄ができたせいか、乗り込んでみると乗客はまばらだった。
平介は降車口に近い席に腰かけ、ゆっくりと通り過ぎていく窓外の風景を見るとはなしに眺める。
やがて国際通りの田原町の交差点に差しかかると、震災で焼失したはずの浅草十二階を模して作られた仁丹塔と呼ばれる建物が見えてきた。街をゆく人々は、浅草らしく、着物姿のほう

が多い。ときおり、円タクが電車を追い抜いていく。人々のざわめきが聞こえてくる車内で、平介は、東京という街の持つ、雑多な雰囲気にひたっていた。陽射しは柔らかく、車内に差しこみ、平介はつい、ウトウトし始めた。

そんな平介をさきほどから観察している人物がいた。目つきの鋭い、痩せぎすの背の高い男だ。年齢は三十を少し過ぎた位であろうか、インバネスコートにウイングカラーのシャツ、細身のネクタイをして、ステッキを持っている。実は、この男、平介が出版社を出たときから、ずっと彼の後を尾行していたのだ。

そんなことはいっこうに知らない平介は、柔らかな陽ざしを全身に受け、ゴトンゴトンという車体の響きに身をまかせるようにゆっくりと舟を漕ぎ始めた。

市電はすでに上野に近い、稲荷町にさしかかろうとしていた。

すっかり熟睡してしまった平介は、終点の省電上野駅前で車掌にゆり起され、あわてて飛び起きた。

平介は省電の改札口から吐き出される人々の間をぬって進み、不忍池を右手に見ながら急ぎ足で歩く。弓子の宿泊しているSホテルは、その不忍池に近い池之端の湯島天神の側にあるのだ。

車内で平介を見張っていた男が、少しの距離を置いて、ゆっくりと、だが確実に後を追う。平介は、その男には全然気づかず、早足でホテルに向かった。

Sホテルは、もともと観光客目当てに建造されたもので、レンガ塀に囲まれた瀟洒な建物

だ。先の震災でも、別館の一部が焼けただけで、大きな被害はなかったというから、よほど、丈夫に作られているのだろう。入口の部分には、政府の南方進出計画のひとつとして普及させている棕櫚の木々が幹の頂上に大きな葉を繁らせている。

平介は、その緑色の大きな葉を見上げつつ、正面玄関の扉を開け、フロントに向かった

ホテル内のロビーには数人の紳士がおり、静かに談笑している。フロントでは、いかにも品格を重んじているといった風の片眼鏡をかけた初老の男が平介をむかえた。

「動天社の桧前と申しますが。お客さんの田所弓子さんにお会いしたいのですが」

平介は、やや遠慮がちに尋ねる。

フロントの男は「少々お待ちください」というと、後ろを振り返り、ルームキーがないのを確認してから、呼鈴を鳴らしてボーイを呼びつけ、客室に向かわせる。

「ただいま使いをやりましたので、そちらの席にかけておまちください」

それだけいうと、デスクから帳簿を取りだしてめくり始めた。

平介は礼をいうと、ロビーの中央にある柱を囲むようにして並べられている椅子に腰をおろし、弓子の来るのを待った。

平介を尾行して来た男は、反対側の壁際の席に座って、新聞を読んでいる。しかし、その視線は、絶えず平介のほうに注がれていた。ややあって、フロントの脇にある赤い絨毯を敷いた階段を、ワンピース姿の弓子がゆっくりと降りてきた。

「あら、桧前さん。きょうはおひとり?」

と、いって近づいてくる。上品な香水の匂いが鼻をくすぐる。

「ええ、草二郎君は、いまちょっと手が離せんのです。それより、杉山一男さんの行方がわかりそうですよ」
そう、平介は微笑みながら話しかけた。
「まあ、ほんとうですの？　それで一男さんはいまどこに住んでらっしゃいますの？」
弓子は驚いた仕草を見せ、平介に尋ねる。
「ええ、それが……」と、平介はことばを濁し、
「ちょっと、外を歩きながら話しませんか？」
と提案した。
冬場とあって人気のない不忍池のほとりを、平介とコートをはおった弓子がゆっくりと歩く。ときおり、上野駅のほうから汽車の汽笛が聞こえてくる他は、吹く風に揺れる木々のざわめきだけが二人を包んでいる。
「弓子さん」
平介が静寂を破るようなハッキリとした口調で話かけた。
「ひとつ聞きたいことがあるんですが……」
「ハイ、なんでしょうか？」
弓子は平介のほうを向いて尋ねる。
平介はコートの襟をただすと、いいにくそうに視線をそらして質問した。
「こんな事をいうのは失礼かもしれませんが、貴女は、立派な教育を受け、上流社会で育った人間ですね。なのに……なぜ……」

弓子が平介のことばをさえぎって口を開く。
「なぜ、一介(いっかい)の花火師を、そんなに懸命に捜しているのか……そうおっしゃりたいんでしょ
?」
「はい」平介は質問が見すかされてしまったことに照れたように頭を掻(か)く。
弓子はクスッと微笑んで、水鳥が泳ぐ水面を見ながら淡々とした口調で話しはじめた。
「私がまだ五歳のときだったわ。両国の川開きに、私の家(うち)では屋形船を借り切って隅田川に出たの。父や母や使用人も一緒だったわ……。それまで花火を間近で観たことのない私にとって、近くで観る花火の綺麗なことといったらなかった。ところが、船の上で料理していた天ぷらに火が入ってたちまち火事になってしまったんです。皆、隅田川に飛びこんだわ。泳げなかった私は、必死になって父に摑(つか)まった」
「でも、父も力がつきてきたらしく、もう駄目かもしれないと思ったとき、助けてくれた人がいたの。それが一男さんのおとうさまだったの」
そういい終えると、弓子は視線を上野の山のほうへ移し、軽く溜息(ためいき)をついた。
「父は大層喜んで、一男さんのおとうさまに、莫大(ばくだい)な謝礼を支払ったわ」
平介が訊く。
「でも、そのことだけで一男さんと仲良くなったんですか?」
弓子は微笑みながら平介を見つめて答える。
「父は……もう三年前に亡くなりましたけど、それは大変な自由主義者(リベラリスト)でした。ですから、相手がどんな職業の人であろうと差別などしない人間でしたの」

平介は感心したように、
「偉い人だったんですね……」
とつぶやき、弓子を見つめた。でも、弓子はあまり嬉しそうな顔をせず、ことばをつづけた。
「でも、結局、自由主義者ということが仇になってしまいました」
「どうしたんですか？」
弓子は平介の問いに、一語一語、ゆっくりとかみしめるように答えた。
「米国で貿易を営んでいた父は、そういう主義から労働者を大事にするあまり、同業者にねたまれ、破産に追いこまれ自殺してしまったんです」
「……それは」平介はなんといっていいかわからなかった。弓子はことばをつづける。
「その後、父の友人だった日本の資産家の人が出資してくれて、私は父と同じ商売を始めました。……でも」
「でも？」
「いえ、なんでもありません」
そう答えると、弓子は眼を伏せた。何かいいたくないことがあるのだろう。弓子はしばらくのあいだ、沈黙していたが、やがてサッパリした顔に戻り、こういった。
「私の幸せだったころの思い出、それが一男さんなんです」
平介は、彼女が米国という異国において経験したであろう苦難を想い、黙って頷いた。
平介は、その後、関係のない雑談をしつつ、草二郎が調べあげた事を報告し、明日は自分が直接、川越に行ってみると告げ、弓子と別れた。

八

「僕に何の御用ですか？」
不忍池（しのばずのいけ）で弓子と別れた平介は、省電上野駅の雑踏のなかで後ろを振り返ってそういった。
平介にそういわれたのは、いわずと知れた痩（や）せぎすの男であった。男は別段、驚いた様子（ようす）もなく、ステッキをひょいと持ち直すと、口の端を吊（つ）り上げて、薄笑いを見せながら答えた。
「知っていましたか……」
男は、少し高い声でそういいながらゆっくりと平介に近づいてくる。
「あなた、動天社の桧前さんでしょ。編集部員の……」
「そうだ」
平介は憮然（ぶぜん）としながら答えた。
「私は、こういう者です。桧前さん」そういいながら、男は懐中から一枚の名刺を差し出した。
外務省　調査局　服部洋之助
名刺には、太い活字で、そう印刷されていた。平介は名刺を受け取り、服部と名乗る男と名刺をいぶかしげに何度も見比べる。
「疑っていますね。よろしい、では一緒についてきてください」
服部は、そういってステッキで、サッとコンコースの出口を指した。ステッキの指すところには、一台の黒塗りの大型自動車が停っており、その脇に立っている運転手らしき男が、鳥打

帽をとって挨拶を送ってきた。
服部は微笑みを浮かべながら、
「ぜひ、来て戴きたいのです。あなたにとっては、そこで有意義な情報が得られるはずです。それとも、お断りになりますか？　まぁ、無理にとはいいません。しかし、来て戴いたほうがいいと思いますよ」
と、いいかたは丁寧ながらも、有無をいわせぬ口調で平介にささやいた。
平介はしばらくのあいだ、服部と車を見比べていたが、やがて決心がついたのか黙って車の方に歩き出した。
平介を乗せた黒塗りの車は、市電の線路にそって、日比谷通りを走る。土曜日の夕方とあって、丸ノ内の宮公庁街は人影もまばらである。宮城を右手に見ながら、数分走ると晴海通りとの交差点に出た。左に曲がれば数寄屋橋、銀座などの繁華街があり、右に曲がれば参謀本部など軍の施設が多い霞ヶ関である。
平介はその交差点で信号待ちで停車したとき横目で服部を睨みながら、〈軍人には見えないが、ひょっとしたら……〉という考えが頭をかすめていた。
信号塔の表示札がススメに変わり、車が発進する。車は、右に曲がった。
右折して三百メートルほど走ると、左手に大審院の古めかしい建物が見えてきた。レンガ造りの建物が夕陽を受けて、さらに赤く染まって見える。
車は、その大審院の角を左に曲がると、つぎの角で右折し、海軍省と向いあっているビルの前で停った。

「どうぞ」
先に降りた服部がドアを開いて、平介に声をかけた。
「着きました。さあ中へ」
そういって服部がステッキで指した建物の入口には〝外務省〟という大型のプレートがかけられていた。
新聞などで、ときおり目にする建物であるが、実物を見るのは平介にとってはじめてである。服部は先に立って、スタスタと階段を上がっていく。平介は覚悟を決め、後に従って階段を昇り始めた。
夕方とあって、建物のなかはしんと静まり返っている。通路を歩く、服部と平介の靴音だけが、木張りの床に音を立てていく。
いくつかの階段を昇ったあと、通路の突きあたりにある部屋の前で服部は立ち止まり、かしこまった口調でささやいた。
「どうぞ、みなさんお待ちかねです」
平介は、ドアの向こうで待っている人物をあれこれ想像しつつも、胸の動悸が早くなっている自分に気づいた。
〈落ち着くんだ〉そう自分にいい聞かせると、冷たい感触の真鍮製のドアノブに手をかけ、ゆっくりとひねった。
部屋のなかには数人の男たちが会議テーブルを囲むように座っていた。西日が差しこむ窓が正面にあるせいか、顔はよく見えないが年配の人間が多いようだ。みな一様に押し黙って平介

のほうを向いている。
だれかが小声で、
「やっと、これで関係者が揃ったようだな」と、ひとりごとのように囁いた。
「いや、もうひとり来るはずだが……」また、別の誰かが答える。
平介は訳がわからずに立ちすくんでいたが、そこへ、
「どうも遅れちゃってすみません」という声が背中のほうから聞こえてきた。
〈この声は!〉平介が、後ろを振り返ると、案の定、草二郎が立っていた。
「そ、草二郎くん!」思わず大声が出る。
「やあ、平介さんも来ているとは知らなかったなァ」と、草二郎はまるで子どもが悪戯を見つかってしまったかのように、バツが悪そうに頭を掻いた。

九

部屋のなかには五人の男が席にかけていた。大きなガラス窓の外は薄紫色に暮れていく帝都の街並みが見える。茶を持って入ってきた事務員が室内の電灯をつけ、部屋のなかがサッと明るくなった。
部屋にいる五人の顔がはっきり見える。窓際の席で、しきりにカイゼル髭をいじっている男は、警視庁の高石警視。まだ四十代後半にもかかわらず、警視の地位にまで昇りつめた切れ者だ。その隣にいるのは柏原警部、いわずと知れた上野署の主任刑事部長である。先刻から、し

きりにパイプをふかしている恰幅のいい初老の男は、外務省の新宮伯爵。そして、その隣が平介を連れてきた服部洋之助。神経質そうに懐中時計の蓋を開いたり閉じたりしているのが、同じく外務省の書記官である井上清二。未だ二十代半ばであろうか。そして、残る二人が草二郎と平介であった。

　事務員らしい男が、一同にお茶を出し終わり部屋の外に退出する。ドアが閉まる音がすると、それが合図だったかのように高石警視が立ちあがり、口を開いた。

「本日みなさんにお集り戴きましたのは、去る二十五日に起こりました浮世絵消失事件、及び国宝級絵画の海外流出問題についてであります」

　部屋中に響き渡るような大きな凜とした声であった。

　高石警視は一同をゆっくりと見渡しながら、しっかりとした口調でことばをつづける。

「ここ数年、帝都を中心として起きている国宝の盗難事件は二十数件に及び、その内の七割が……」警視は、ここでことばをいったん切って、いいにくそうに「残念ながら未解決なのであります」とつづけた。

「我々としても、全力をあげて捜査をしておるのですが、ほとんど手掛かりはなく、行き詰まっているというのが現状です。唯一の手掛かりといえば、事件の陰にいずれも美術品専門の故買屋の影がチラついているということです。みなさんも知ってのとおり、故買屋というのは、盗品と知ってて買い取る商人のことです。ただ、今回の一連の事件の陰にいるらしい故買屋は、美術品のみを相場より高値で引き取っているという点で、そこがそれまでの故買屋とちがっているのです」

高石警視は、一気にそう説明した後、一同を見渡し、声を一段と高めて、「ところが、先日外務省の新宮氏より連絡があり、盗まれた品のほとんどが海外に流出しているということが判明したのであります」

名まえが出た新宮伯爵が、軽く咳払いをしてうなずく。

「つまり、一連の事件の陰には、同一の黒幕の存在が匂うのです」

警視はそこで言葉を切って、

「ただ、各事件の犯行の手口から見て、同一犯の単独犯行という考えは難しいのです」

新宮伯爵が、

「つまり、実行犯は複数で、黒幕がいると、そういうわけか」と納得したように云う。

柏原警部が発言する。

「いままでの事件の手口は様々でしたが、先日の帝都美術館の事件はそれまでの比較的稚拙な手口とちがい、かなり巧妙に仕組まれたものです」

「黒幕が直接手をくだしたのかもしれないというのかね」新宮伯爵が警部に尋ねる。警部は首を振って、

「ちがいます。いままで実行にくわわらなかった人間が手をくだしているとは考えられません。ただ、その黒幕に近い人物が実行したのではないかとは考えています」と答え、つづけて、

「その実行犯を捕えれば、ほんとうの犯人に迫れるかもしれないのです」といいきる。

警部は草二郎のほうをチラリと見て、

「ここに来て戴いている牧野草二郎君が、先日の美術館の犯人を推察したというので、黒幕に

迫れるかもしれません」
という。一同の視線が草二郎に注がれる。

十

「博士は、事件の起きた朝、いつものように入室してから絵をすり替え、警備員を呼んだのです」
草二郎は穏やかな口調だが、キッパリとそういいきった。一同がざわめく。
「犯人は第一発見者である有馬博士です」
柏原警部が口をはさむ。
「そりゃ不可能だよ。博士が入室してから出てくるまで五分と経っていないのだよ」
たしかに額に入った絵を、偽物とすり替えるには、五分という時間は余りにも短い。
「警備員を呼んだときは、二、三枚しかすり替えてなかったとしたらどうですか？」
平介が納得したように、
「警備員が人を呼びに行っている間に、残りをすり替えたのか！」とつぶやく。
草二郎はニッコリとうなずく。
「しかし、博士には動機がないぞ」柏原警部が不思議そうに尋ねる。草二郎は声を落として、
「博士は娘のために犯行を行ったのです。博士には戸籍上の実子はいませんが、隠し子がおりその子のための犯行なのです」と答えた。

草二郎の説明に、一同はシンと聞き入っている。
「その娘は、小さい時に養子として貰われていきましたが、その世話した人物が今回の事件の黒幕だったのです」
草二郎は一呼吸置いてポツリとつけ加えた。
「その娘の名は……弓子といいます」
平介は弓子の名が出た瞬間「アッ」という声をもらした。
草二郎は平介の視線を避けるようにして、着物の袂（たもと）に手を突っこみ、木片のようなものを取り出した。
「これは当日、現場で拾ったものです。最初は仏像の破片かと考えたのですが色合いが違っていた。しかし、調べた結果、やはり仏像のものでした。ただし、外側でなく内側の……」
草二郎は、そこで全員を見渡す。
「みなさんは〝胎内仏（たいないぶつ）〟というものを御存知ですか？　内部が空洞になっている仏様で、中には小さな仏様の像がたくさんつまっています。博士はその中に、盗んだ絵を隠したのです」
「証拠はあるのかね？」高石警視が尋ねる。
「ええ、今朝美術館の館長立ち会いのもとで、調べてみました。仏像の内部には盗まれた絵がありました。」
と、こともなげにあっさりと答えた。
「なるほど、有馬博士については、すぐに手配して捕えよう。しかし、ほんとうの首謀者（しゅぼうしゃ）である黒幕とはだれなんだ」

と、説明を聞き終えた後、高石警視が草二郎に尋ねた。
すると、草二郎ではなくいままでジッと考えこんでいた新宮伯爵が口を開いた。
「その人物の名を申し上げる前に、みなさんに詳しく知って欲しい事実があるのです。服部、資料を」
「ハッ、かしこまりました」
服部洋之助は書類封筒を取り出すと、なかから書類の束と何枚かの写真をテーブルの上に並べた。
「これらは、外務省の米国駐在員が調べてきたものです。これによると、盗まれた国宝の五割以上が、米国の資産家の手に渡っていることがわかります。開国以来、多数の国家的財産が海を渡りましたが、それらの品々のなかに非合法な、つまり密輸出の物も決して少なくありませんでした。しかし、今回明るみに出た品々は、それら過去のものとは比較にならないほど、大規模な量なのです」
写真と品々の名まえが書かれた書類が、テーブルの上を廻(まわ)される。平介は、写真の美術品のいくつかに見憶(おぼ)えがあった。
〈いずれも有名な物ばかりだ。しかし、おかしいな……盗まれたとすれば大事件のはずなのに、聞いたこともないものばかりだぞ……〉
写真を手に、そう考えている平介の疑問を察知したかのように、高石警視が、
「盗まれた品々は、国宝級のものであることはもちろん、そのほとんどが個人所有のものではなく、国が管理しているものだった。国としても不祥事(ふしょうじ)を発表するわけにはいかないので、報

道管制を敷いたという訳だ」と、にがにがしい口調で説明する。
「ちょっと待ってください。なるほど、そういう事件が起きているということはわかりました。でも、それと僕と、どんな関係があるんです？」
平介がだれにというわけでなく尋ねた。彼の心のなかでは、その答は出ていたが、できれば否定して欲しいと願っていた。右手をテーブルの下でキュッと握りしめる。
「平介さんにはわかっているはずです」草二郎がやさしく静かに答えた。
平介が草二郎の顔に視線を向ける。草二郎は何もいわず、黙って首を縦に振った。
平介は「やはり……」と力なくつぶやき、がっくりと肩を落とした。彼の脳裏に、弓子の顔が浮かんでは消えた。
〈弓子さんが国宝の密輸出にからんでいたなんて……でも、どうして彼女が!?〉平介は目をつぶって無念そうに自問する。
「では、われわれがまとめた、この事件の犯人に関する考察を発表したいと思います」平介の瞑想(めいそう)は柏原警部の声で中断された。
「国宝の海外輸出は、一定の条件以外ではすべて禁止されています。しかも、通常の美術市場にそれらの品が出品された場合、それが外国であってもすぐにわかるはずです」
たしかに、国宝級の美術品ならば市場に出ただけで話題になるだろうし、評判を呼ぶはずだ。
一同は警部の話にうなずく。
「ではなぜ、われわれの知らないうちに海外の一部資産家の手に渡ってしまったのか？」
警部が疑問を投げかける。

「それは国内に、そして国外に密接なつながりを持つ人物がいたからです」

警部はそこで話を区切り、テーブルの上の湯飲に手を伸ばし、ゴクゴクと一気に飲み下した。

そして、わずかのあいだをおいてから、決心を固めたように話をつづける。

「我が国の政治・経済に太いつながりを持ち、海外の企業に自分の事業の便宜を計ってもらうべく、国宝を流出させている人物――津島要八郎が陰にいたのです」

平介は立志伝中の人物として国民のあいだで尊敬されていた人物の陰の行為に憤慨し、眉根にしわを寄せる。

「しかし、残念なことに、われわれは状況からそういう推定にたどりついただけであって、決定的な証拠はないのです」警部は残念そうな口調で締めくくった。

新宮伯爵が問いかける。

「告発するために必要な手は打ってあるのかね？」

警部は軽くうなずき、平介のほうを見る。

「そこにいる雑誌記者の桧前君が、津島翁と米国を結ぶ人物と親しいのです」

平介はハッとした。

〈そうか、それで俺もこの会合に呼ばれたのか！〉

警部は平介に語りかけるように、

「桧前君には、その人物にさらに接近し、津島翁告発の糸口を見つけて貰おうと考えています」

高石警視が発言する。

「柏原君。有馬博士を捕えて聞き出せばいいじゃないか？」
警部は首を振って、
「いいえ、彼は自分の娘のこともあり、口を割るということは考えられません。それに、証言だけでは、実力者の津島翁の告発は不可能です」と答えた。
高石警視は考えこみながら、
「となると、頼みの綱は田所弓子だけということになるな」と呟いた。

十一

草二郎と平介が会議を終え、外務省差し回しの車で浅草に送ってもらったのは、すっかり日が暮れたころであった。
国際通りの吾妻橋の手前で降ろしてもらったふたりは、どちらからという訳でもなく、ブラブラと浅草寺に続く土産物商店街ともいうべき仲見世に入っていく。
仲見世はまだ宵の口ということもあって、たくさんの人でごった返している。吉原帰りらしい、お店者が酒くさい息を吐きながらすれちがう。
平介がふと思い出したように尋ねる。
「そういえば、君がけさ会社に残しておいてくれた伝言だけど。田所弓子なる人物は存在しないというのは、どういうことなんだい？」
「さっきもいったように、弓子さんは田所氏に娘同然に育てられました。しかし、彼女の本名

は戸籍上、亡くなっている実の母親の姓なのです」
「つまり、弓子さんは田所氏とは養子縁組をしていないというんだね？」
「ええ」
「……」
ふたりは黙りこんだまま歩く。やがて仲見世を抜け、浅草寺の境内に入っていく。
本堂の前で左手に曲がり、浅草公園に入る。震災前なら、正面にレンガ造りの十二階、通称〝凌雲閣〟が見えたのだが、いまは何もなく黒々とした木立ちが広がっている。
さすがにここまで来ると、先刻までの人ごみがウソのように、静けさだけが漂っている。
公園の入口にあるベンチに腰をおろした草二郎に、平介は立ち止まったまま困ったような顔をして尋ねる。
「なあ草二郎君、僕はどうすればいいのかなァ」
草二郎が顔を上げる。
「弓子さんのことですか？」
「うん。さっきの話し合いでは、とりあえず彼女を泳がせておいて、決定的な証拠をつかむということだったけど、なにか後ろめたくて……彼女はほんとうは悪人じゃないと思うんだ。だから……」
「わかりますよ」と、草二郎が白い吐息を出しながらやさしく答える。
草二郎は満天に輝く星を見上げ、ひとりごとのように呟いた。
「だれだって、根っからの悪人はいませんよ。もし、仮に悪の道に入ってしまっても、きっと

連れ戻すことができるし、連れ戻せる人もいるはずです」
「弓子さんにとっての、その人とは杉山一男さんか」
「ええ。彼女は彼のことを唯一の心の寄りどころにしているような気がします」
「無意識の内に、救いを求めているという訳だね？」
草二郎は、平介がそう聞き返すと「はい」とやさしく答え、
「明日は、一番の汽車で川越に行ってきます」
とつづけた。
「うん、よろしく頼むよ。ところで、田所氏はなんで弓子さんを引き取ったのかな？」
「子どもがいなかったというのも理由のひとつでしょうが、亡くなった田所氏にはもっと別の目的があったのではないでしょうか？」
「というと？」平介がいぶかし気な顔をする。
「つまり、田所氏は弓子さんを、ひょっとしたら津島翁の実子だと考えていたのではないかということです。自分の可愛がっている学者の隠し子をあずかってくれ、と財界の実力者からいわれたら、だれでもかんぐりたくなる。そして、もしそうならば、彼はいろいろな面で、すごく有利になる。そういう計算が働いても不思議じゃないでしょ」
「うーん」
平介は草二郎の推察に感心しながら腕を組む。
二人はしばらくのあいだ、黙りこんでいた。やがて、草二郎はベンチから立ち上がり、大きくのびをすると、

「平介さん、お腹空きませんか？」
といって立ち上がった。

十二

翌日、平介は弓子のもとを再び訪れた。不忍池には薄氷がはっており、水鳥の姿もほとんど見えないほど凍てついている。
平介はコートの襟を立て、霜柱を音を立てて踏みしめながら、彼女の宿泊しているSホテルを訪れた。
あいにくと弓子は外出していて留守だった。
〈朝早くからどこへ行ったのかな？〉
平介は、ふとそんなことを考えながらホテルをあとにした。日曜日、しかも校了後なのできょうは仕事はない。ゆっくりと弓子と話をしようと考えていたのに、あてがはずれてしまった平介は、気分転換に銀座に出てみることに決めた。
御徒町駅から省電の外廻りに乗り、有楽町で下車する。改札口を抜け出た平介は晴海通りに出て、尾張町の交差点に向かってブラブラと歩く。
〈さすがに日曜とあって人出が多いや〉
などと考えながら、通りに面した商店のウィンドウを覗きこみながら、あてどもなくゆっくりと歩く。T堂の前では飾られている鉄道模型を見て、

〈草二郎君は、もう川越に着いたかな〉
などと、上野を一番列車で発った草二郎のことを想い浮かべる。彼がうまく杉山一男を見つけ出してくれれば、弓子さんもほんとうのことを打ちあけてくれるかもしれない。平介は、そう考えているのだ。
尾張町の交差点まで来たとき、交差点に面したデパートの前に、なにやら人だかりがしているのが見えた。
〈なんだろう?〉
平介は持ち前の好奇心が首をもたげ、知らず知らずのうちに早足になる。
近寄ってみると、若い会社員ふうの男と、中年の労働者風の男が、激しくののしりあいをしている。
〈なんだ、喧嘩か……〉と、ちょっぴり不満気に思ったとき、すぐうしろの建物から飛び出してきた男が大声で叫んだ。
「だれか、警察を呼んでくれ、泥棒だァ!」
男の飛び出して来た建物は、銀座でも有数の画廊である。平介はピンとくるものを感じ、興奮気味にしている男に話しかけた。
「泥棒ですって?」
男は顔を真っ赤に上気させながら「そうだ」と答える。
「何が盗まれたんですか?」
「広重の版画だ。ちょっと目を離した隙にやられちまった」

男は口惜しそうに、そういいながら周囲を見渡す。平介は、ハッとあることに気ずき、あわてて後ろを振り返った。野次馬は、こっちに集まりつつある。さきほど喧嘩していた男たちの姿は見えない。

「そうか！」平介はひと声そう叫ぶと、走り出した。交差点を渡り、左右を素早く見渡すと、目指すものを見つけたらしく、小走りに急ぐ。

京橋に近い路地裏で、三人の男がなにやらヒソヒソ話をしている。その内のふたりは、つい先刻までデパート前で喧嘩していた男たち。もうひとりは、幅広の山高帽にフロックコートという出立ちの紳士然とした男である。

「なるほどね。喧嘩に人の注意をそらしておいて、その隙に絵を盗む。典型的な囮作戦というわけか、いや！おみごと」

との大声に、三人はハッとして振り返る。そこには、いつからいたのか平介がビルの壁に寄りかかるようにして立っていた。

「だ、旦那！」

男たちの内、フロックコート姿の男が平介を見て叫ぶ。

平介はニヤッと笑って、帽子のつばをグイと上げ、「久し振りだな熊公」と答えた。

「やだな旦那、そんな昔の呼び名、いわないでくださいよ」

そういいながら、ゆっくりと近づいてくる。他のふたりは、様子をジッと見ている。

「いまは真面目にやっているんですから……」といいながら、いきなり殴りかかった。

しかし、平介は身をかがめてその拳(こぶし)をヒョイとよけ、熊公の右腕を掴むや、一本背負いを鮮(あざ)やかに決める。
それを見た他のふたりは、あわてて逃げだす。
熊公はしばらくのあいだ、地面に大の字になっていたが、やがて腰をさすりながら起き上がり、
「ふー、旦那は相変わらず強いすっねえ」とうめいた。
平介はキッと鋭い目つきになり、ピシャリとした口調で、
「さ、どうして、あんなことをしたんだ？」といい放つ。
「訳を聞かせて貰おうか？」とつめ寄った。
熊公は「へえ」と力なく返事をし、ポツポツ語り出した。
熊公の話によると、最近、浮世絵専門の故買屋ができて、盗品でもなんでも高値で引き取ってくれるのだという。熊公は空巣専門で、平介によって捕えられたことがあり、いちどは改心したのだが、金の魅力には勝てず、再び悪の道に入りこんだのだという。
〈浮世絵専門の故買屋か……ひょっとすると、裏で津島翁とつながりがあるかもしれないな〉
平介は熊公の話を聞きながら、ふとそう考え、
「お前のことは警察に黙ってってやるから、ひとつ協力しないか？」と提案した。

十三

熊公にあることを頼んだ平介は、ふたたび湯島にあるSホテルに弓子を尋ねた。
フロントで弓子のことを尋ねると、ちょうど外出から戻ってきたところだと教えられた。平介はロビーの椅子に腰かけ、彼女がやってくるまでのあいだ、頭のなかでこの数日間の出来事を想い返してみた。弓子の顔が浮かぶ。
杉山一男を捜してくれと哀願する真剣な眼差し。
故郷、日本を語るときにみせる、えもいわれぬ懐し気な表情。
そして、何かを隠しているらしい物いいたげな悲し気な態度。
それらひとつひとつの弓子の表情や、仕草がクルクルと頭のなかを廻る。
〈どうかしちまったかな?〉平介は、弓子のことばかり考えている自分に気づき、苦笑いを浮かべた。
「お待たせしました」涼やかな声がし、弓子がやってきた。帰ってきてから着替える間もないうちに平介が来てしまったのか、コートを着こんでいる。
「やあ弓子さん。朝早くからどちらへお出かけだったんですか?」
平介は内心、ドギマギしながら悟られまいと元気に話しかける。
「ちょっと、人と会わなければならない用事がございましたの……」
弓子は小さな声で答えた。
平介は弓子をホテルのロビー脇にあるティーラウンジに誘った。
ラウンジの窓際の席に腰かける。ラウンジからは不忍池が一望できた。空は青く澄みきり、いつもより高く見える。

「実はけさ、草二郎君が川越へ向かいました」
「まあ、では明日にはわかりますわね」
弓子は喜びの表情を現わして平介を見つめる。
「ええ、本人にまちがいなければ会えるのではないでしょうか。ところで弓子さん、きょうはぜひ貴女にお聞きしたいことがあるんですが……」
「なんですの?」弓子はきょとんとした顔で小首をかしげた。
平介はいいにくそうに視線をずらしながら、「あの、うーん。じつは先日、僕は貴女を本郷でお見かけしたんです。そのとき、貴女は車に乗っていらっしゃったので、お声はかけませんでしたが、一緒にいらっしゃったのは津島要八郎さんでしたね」
と一気にしゃべった。弓子は津島翁の名まえが出ると、ビクッと体を震わせた。
平介は弓子の反応をたしかめ、
「津島翁とはどういう御関係ですか?」と質問した。
弓子は努めて平静を装いながら、
「津島さんとは、父の代から貿易の取り引きがありますの。どんな貿易かお知りになりたいですか?」
と答えた。しかし、平介に視線を合わそうとしない。
気まずい沈黙のときがゆるやかに流れる。
平介は話題を変えようと思案し、
「そういえば、明日なんですが、よろしければ上野あたりで待ち合わせしたいと考えているん

ですけど」といいながら、弓子のほうを見て微笑む。
「うまくいけば、杉山さんも出てきてくれるはずです」
弓子は喜びの表情をして、
「まあ、わかりました。ぜひ、行きますわ。で、上野のどこへ行けばいいのかしら？」と尋ねてきた。
「精養軒でどうでしょう。時間は、午後三時」
弓子は「ハイ」と返事をし、窓の外をうれしそうな顔をして見やった。
平介はその横顔を見ながら、
〈この女が、悪者だなんて、やっぱり思えないなァ〉と考えていた。
そのとき、背後からいきなり声がかかった。
「失礼します。お客様は動天社の桧前様でいらっしゃいますか？」
白い制服に身を包んだホテルのボーイであった。
平介が頷くと、ボーイはフロントのほうを手で示しながら、
「お電話が入っております」といって頭をさげた。平介は弓子に軽く会釈して席を立った。
数分後、平介が会社からの電話を終えて戻ってきてみると弓子の姿は見えなかった。
平介は周囲を見廻しながら、通りかかったボーイを呼び止めた。
「ああ君。こちらにいたお嬢さんを知らないかな？」
「お客様が席をお立ちになったとき、伝言をお伝えしたところ、すぐに立ち上がって部屋に行かれましたが……」

なかに入ったが、そこに弓子はいなかった。
弓子の客室は、ホテルの二階の奥にあった。ドアが開いている。平介はノックもそこそこに
平介は、嫌な予感がしてすぐに弓子の部屋に向かった。
「ええ、お嬢さま宛にフロントへ届いたんです」
「伝言?」

十四

翌日の夕方は、いつになく肌寒く、風も冷たかった。空には鉛色の雲が低く垂れ込め、道行く人々はときおり空を見上げていく。
ラジオの予報では、夜半から雪になるという。
上野の山にある洋食レストラン〝精養軒〟の一隅に、三人の男達が座っていた。平介と草二郎、それに平介と同じ歳位の青年——杉山一男である。
一男は髪を短く刈りあげており、薄茶色の上衣を着ている。
「じゃあ、こちらが杉山さんなんだね」と平介は草二郎に念を押すようにきいた。
「ええ、もっともいまは杉山じゃなくて西条さんですがね」
と、草二郎が答える。
平介は懐中時計を見ながら、
〈もうそろそろ弓子さんが来るはずだ〉と考えた。

時計から、ふと顔を上げると、草二郎が困ったような顔をしているのに気がついた。
「どうしたんだい?」
平介が尋ねると、草二郎はもぞもぞしている。
「じつは平介さん……西条さんは」
といいにくそうに口を開いた。すると、それを遮るように、一男が口を開いた。
「牧野さんはいいにくいようなので、僕のほうからいいましょう」
平介が一男を見る。
「じつは僕、田所弓子さんという女の子のことはよく覚えていないのです。たしかに花火を一緒に観た記憶はあるのですが、ただそれだけで、それも昔のことですから……。彼女の顔すらよく想い出せないというのが正直なところです」
よく通る、ハッキリとした口調で、淡々と語る。
平介は、弓子がこのことば、つまり一男が弓子のことをほとんど覚えていないということを聞いたら、どんなに落胆するだろうかと思い、気持ちが沈んできた。
〈弓子さんは、一男さんに会うのを楽しみにしているのに……〉
平介はジッとうつむいたまま、弓子の心情を思いやり、目を伏せた。
テーブルの傍らにある石炭ストーブがパチパチと音を立てる。
三人が黙っている内に約束の三時が過ぎた。
しかし、四時になっても弓子は来なかった。
平介は姿を現わさない弓子の身を心配している自分に気がついた。

平介たちが、精養軒で弓子を待っていたころ、彼女は高輪にある津島翁の屋敷で、翁と話し合っていた。
津島翁の屋敷は西洋風だが、その内部は日本家屋風になっている和洋折衷建築である。
三十畳敷きの広い部屋の中央に弓子と津市翁が向かい合っている。
ふたりは黙っており、ときおり、障子越しに聞こえてくるのは風に鳴る木々のざわめきだけである。
弓子はなにがあったのか、暗い表情をして目を伏せ、翁から顔をそむけている。
翁は、茶をゆっくりとすすったあとに、ポツリと、
「おまえには悪いことをしたと思っている」といった。そして淡々とした口調で、
「いくらおまえが知らなかったとはいえ、儂の違法行為を手伝わせていたことは事実じゃ。もっとも、うすうす気がついておったようじゃがの。しかし、司直の手が伸びてきているし」
と語りかける。
「警察は、おまえが儂の手先だと考えているようじゃ」
弓子は顔をあげて、
「津島の伯父さま……」とひとことつぶやいた。
有馬博士を実の父に持つ弓子。そして、その母は津島翁の私生児であった。つまり、弓子は津島翁の孫であったのだ。
しかし、弓子はその事実を知らない。

津島翁が有馬に便宜を計り、田所に託したのも、そういう事情があったからだ。田所が勝手に思い込んだ津島の子というのも、あながちまちがいではなかったというわけだ。
もちろん、津島翁は愛する孫に密輸を手伝わせるつもりはなかった。しかし、彼女の父、田所氏が亡くなったときに、米国に於ける出先機関の消失を恐れ、ほんとうの目的を隠して弓子の貿易会社に協力していたのだ。
「津島の伯父さま」繰り返すように弓子がもういちど呟く。
「わたくし、すぐに、日本を離れます。でもその前に、ぜひ会っておきたい方がおりますの」
弓子は一男のことを思いながら、そう翁に語りかける。
翁はしばらくのあいだ、目を閉じていたが、
「船の出航は今晩じゃ」とキッパリといった。
「弓子、おまえを警察の手に渡すわけにはいかん。それに……お前が捕えられれば、そのつぎは儂に手が伸びる。そうなったときに、津島財閥の何万という社員が路頭に迷うことになる」
弓子は、津島翁のことは恩に思いこそすれ、悪事に加担させたことを恨んではいなかった。ただ、唯一の想い出、一男と再会できないのがくやしかった。こんど、米国に旅立てば、おそらく二度と故郷の土を踏むことはないだろう。
遠い日々の楽しかったころ、そしてそのときの想い出が彼女の脳裏に走馬灯のように走り抜けていく。
外はすでに陽がかたむきかけているらしく、障子が紅く染まっている。
弓子は深く溜息をつくと、顔を上げ、津島翁を見つめ、

「わかりました」と、キッパリといった。
翁は軽く頷き、いとおしむような表情で弓子を見つめた。それは日頃、冷徹な企業家として知られている老人の視線ではなかった。

十五

夕闇が帝都を包み始めたころ、平介は吾妻橋に近いビアホールで熊公と会っていた。
酔客の声がこだまするホールの隅の席で、ジョッキを片手に話しかける。
「わかったかい？」
「へえ」と、熊公が小声で答える。
「だけど旦那、内緒ですよ。あっしがいくら闇の世界に身を置いているとはいえ、仁義ちゅうもんがありますからね」と念を押してくる。平介はジョッキをテーブルに置き、身を乗り出す。
「わかっている。決して口外はしない。だから国外に盗品を運んでいる船を教えてくれ。そして、その船の出港予定も」
「し、声が大きいすよ、旦那」
口に指をあてる仕草をして、熊公が平介に注意する。平介は周囲に気を配りながら、声を低くしてもういちど聞く。
「で、船の名まえは？」
「カインド号でさァ」

「どこに停泊している?」
「日之出桟橋です。芝浦の」
「出港予定は?」
「さっき、仲間が見てきたところ、今晩にも出るような感じで、出航準備をしていたっていってました」
「なんだって!」平介はそう叫んでガバッと立ち上がった。
壊中時計を素早く見て「いま、六時か……」と呟くと、熊公に、
「ありがとう」とひとことといって出口に向かう。
背後から「旦那、よろしく頼みます」と声がかかる。だが、平介は振り向きもせず、なにかにせき立てられるかのようにビアホールを後にした。

数十分後。
平介と草二郎、そして柏原警部の三人が上野署の一室で話し合っている。
「カインド号というのは、米国籍の船だが所有しているのはツシマインターナショナルという会社だ。名まえからわかるように、津島財閥の傘下のひとつなんだ。我々も二日ほど前から監視している」
警部は平介に船のことを聞くと、驚きもせず煙草に火をつけながらそう答えた。
「知ってたんですか」平介が拍子抜けしたかのような口調でいう。
警部はフッと煙を出しながら。

「われわれだって馬鹿じゃないさ」ニヤリと笑う。
「でも、なんでそこまでわかっているのなら、臨検を行うとかして船内を調べないんですか？」
草二郎が不思議そうに尋ねる。警部は片眉を吊り上げ、
「たしかな証拠もなく外国籍の船を調べることはできんよ。国際問題になりかねないからね」
と残念そうに答えた。そして、
「とにかく芝浦に行ってみよう」とつけくわえた。

十六

その晩、隅田川を一隻の水上署の大型ランチが波をたててくだっていた。空には雲が厚く垂れ込めていて月はおろか、星灯りさえもなかったが、ランチはライトを点灯させずにゆるやかに川をくだっていく。
やがて、永代橋をくぐると魚河岸として知られる築地市場の前に出た。この先は品川湾になる。
ランチの上には数人の人影が立っており、せわしなく動き廻っていた。
「近よることはできても、乗船はできませんよ。なにしろ、外国籍の船ですからね」
双眼鏡を手に持った、水上警察の制服を着た四十がらみの船長らしい男が、沖合を見ながら、そういった。

「わかっています。乗り込むつもりはありません」
柏原警部が、潮風を受けながら寒そうに目を細めて答える。警部の隣では草二郎と平介がジッと沖合を見つめている。
ランチが品川湾に出ると、日之出桟橋が右前方に見えてきた。
かすかに大型の貨物船の影が見える。
「このあたりでいいでしょう」草二郎が船長らしい男に話かけた。
船長は右手を高く挙げると、操舵室に合図する。ランチのスピードが徐々にゆるみ、やがて停止した。風と波で、少し船上が揺れている。
「いかんな！　岸壁を離れようとしている」
警部がカインド号を見て叫ぶ。
平介と草二郎が見ると、たしかにカインド号は徐々に桟橋から離れていくのがわかった。
「せっかくここまでやってきたのに、万事休すか」警部が無念そうに呟く。
船は徐々に岸から離れていく。出港の汽笛が響く。
「警部。最後の手段はあります」
草二郎が船を見つめながら口を開いた。
「ほんとうかね!?」警部が草二郎のほうを振り返る。
「ええ、ひょっとしたら絵を取り戻すことぐらいはできると思います」
「どんな方法だ。いや、どんな方法でもいい、やってくれたまえ！」
草二郎は警部のことばを聞くと手に下げていた提灯を頭上にかざすと弧を描くように振り

廻した。
しばらくのあいだを置いてから、ランチの後方から〝ヒューン〟という耳を聾せんばかりのかん高い音が轟いた。
一同が振り返ると、いつからいたのか二百メートルほど後方にある船から巨大な火柱が天空めがけて走るのが見えた。
やがて、轟音とともに、青白い光の花の大輪が夜空いっぱいに輝き渡った。
それは弓子が米国に渡ってからかたときも忘れたことのない夢の光景であった。
つづけざまに火柱が立ち、爆音が轟く――。青い光が幾重にも広がり、きらめいた。空から降る光と、海面に照り返った光が交錯し、まるで走馬灯の中にでもいるような夢幻の世界であった。
草二郎と平介は、両手で耳を塞ぎながら、ぼう然と天空を仰いでいる。

十七

早朝の上野駅のホームに、草二郎と平介がいた。川越に帰る一男を見送りにきているのだ。
「杉山さん、いや西条さん。ご無理をいって申し訳ありませんでした」
そのことばを聞くと、西条は照れたように、
「いやあ、少しでもお役に立てれば。花火屋は打ち上げるのが仕事ですから……」
といってうつむいた。

平介が、
「それにしても、あんな短時間でよく花火の準備ができましたね」と感心する。
「七月の川開きには何千発の花火が打ち上げられるんです。ですから年明けとともに少しずつ東京に運んであったんです……」
と西条がこともなげに答える。そして、つけくわえるように、
「昔、親父の友人だった東京花火組合の人のおかげですよ」
といった。
やがて発車のベルがホームに響いた。一男はふたりに軽くおじぎをすると、客車のドアを開いて車中に姿を消した。

「あの花火を見て、心を揺り動かされたかどうかはわからないけど、美術品が戻ってきたということは、弓子さんの心に、何か感じるものがあったんだと思います」
草二郎は昨夜の雪が降り積もった道を用心深く歩きながら、平介に話しかけた。
雪道が朝の陽光を受け、キラキラと輝いている。
昨夜、花火を打ち上げて、数分後、一艘の無人ボートが貨物船から吊り下げられ、品川湾に放たれた。その中には、国内で最近盗まれた美術品が大事に包まれて置かれていたのだ。
弓子が唯一の想い出と出会い、心を動かしたのかどうか、船が日本を離れたいまとなってはわからない。
津島翁については、当局の手によっておいおい、その所業が追及されるであろうが、草二郎

と平介にとって、そんなことは関係なかった。

「結局、彼女は杉山さんには会えなかったけど、それで良かったのかもしれないな……」

平介が白い吐息を吐きながらポツンと呟いた。

草二郎は、その淋し気な平介を見て、微笑みを浮かべながら話しかける。

「平介さん、またフラれちゃいましたね」

平介は顔を真っ赤にして狼狽(ろうばい)する。

「ば、ばかいえ。何をいうんだ君は」

「オヤ、ちがいましたか。まあいいや、それより警部からこっそり謝礼を戴いたんで、フミちゃんのところで天ぷら蕎麦でも食べませんか？　御馳走(ごちそう)しますよ」

草二郎がそういって、ポンポンと懐(ふところ)を叩く。平介はちょっぴり元気になり、草二郎の肩を抱いて、こういった。

「そういや昨夜から何も食べてなかったっけ。天ぷら蕎麦といわず、うなぎでも食べようや」

草二郎が真剣な顔で口をとがらす。

「駄目ですよ。フミちゃんの店にはうなぎはありませんよ」

そのころ、平介の勤めている動天社では、編集長の桑田龍三郎が、編集部の壁に掛かった時計を見ながら怒鳴り散らしていた。

「きょうは、定例の早朝会議があるのに平介はどうしたんだ！」

時刻はもうすぐ正午になろうとしていた。

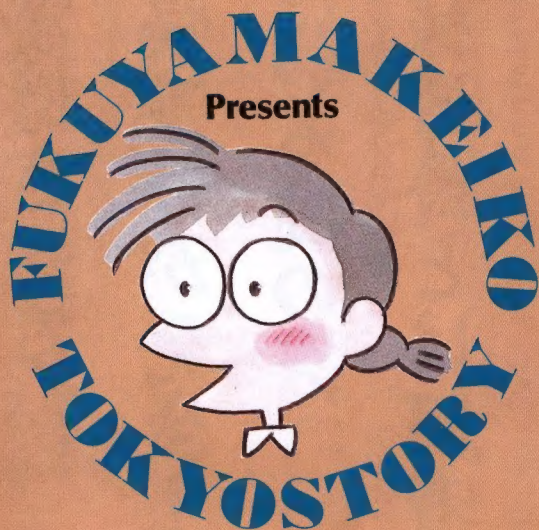
（完）

東京物語

――次号予告――

帝都を震撼(しんかん)させる
怪事件が発生！
その陰にいる謎の男
機械男爵(からくりだんしゃく)とは何者なのか？
本誌３月号より３回連続でお送りする
「機械男爵の挑戦！」に御期待ください。

東京物語

愛蔵本

Animage '89・2月号第2ふろく
1989年2月10日発行(毎月1回10日発行)第12巻第2号